

313  
467

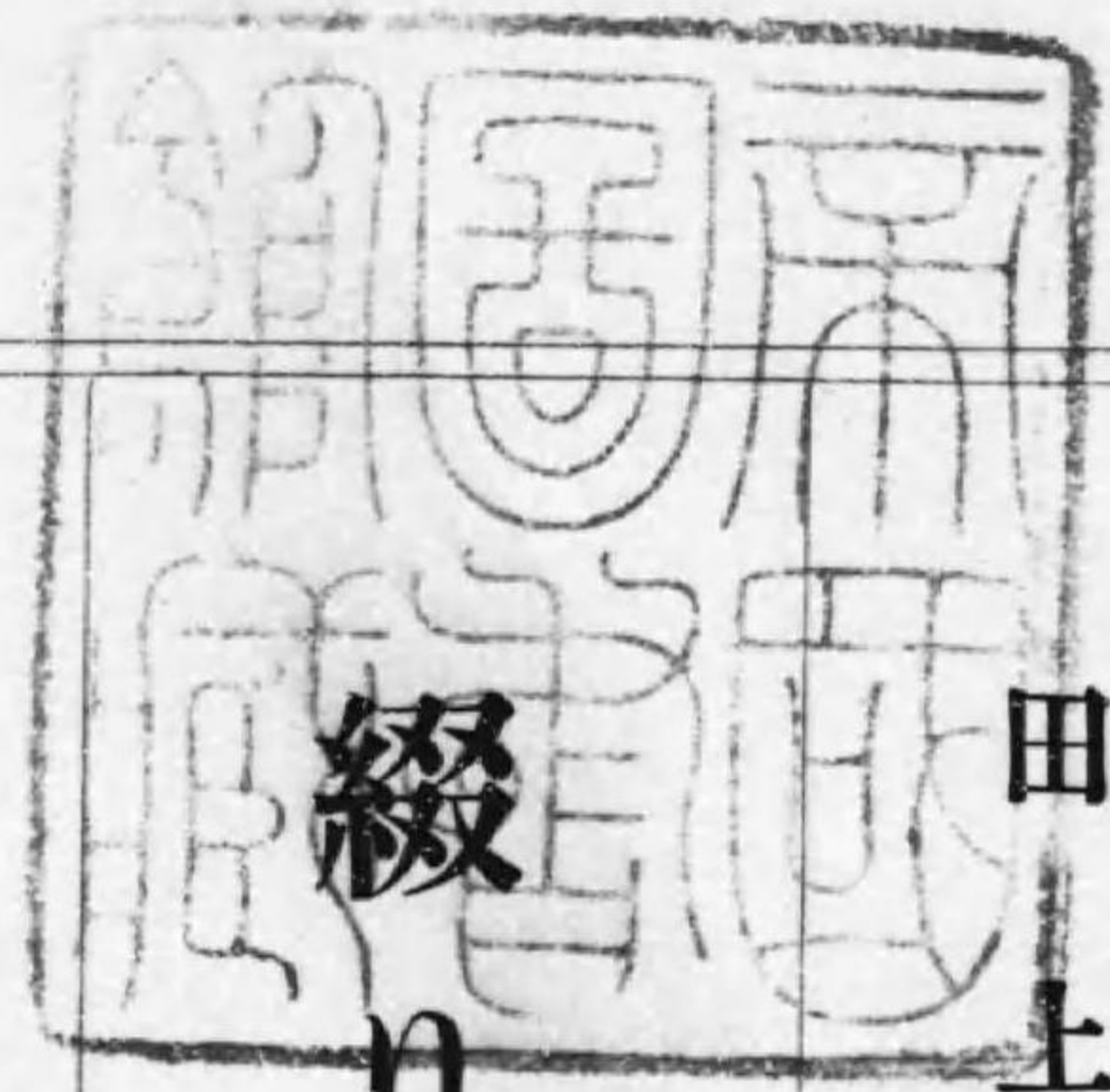


始





特218  
612

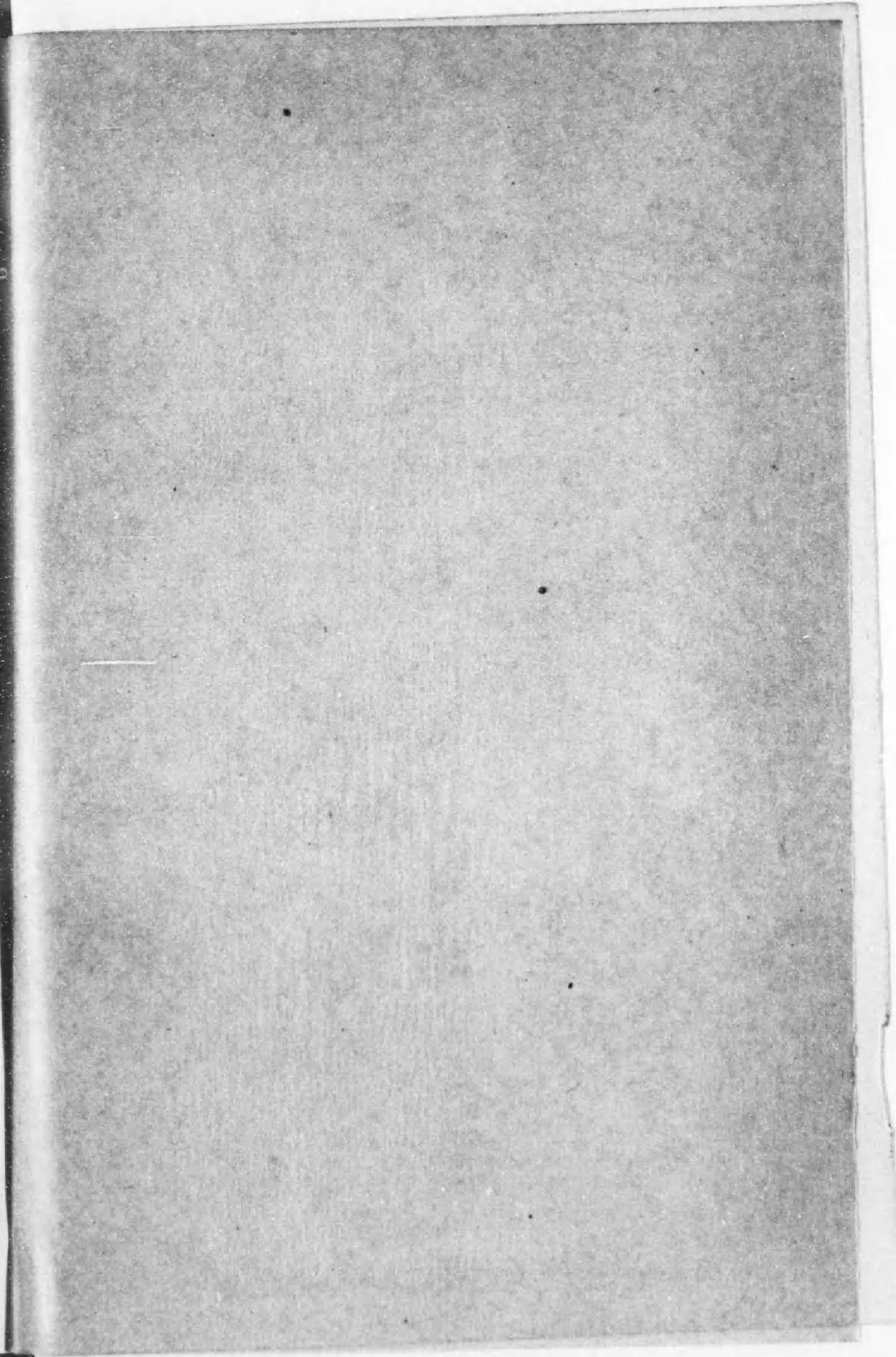


田上新吉著

綴り方指導原論



東京目黒書店發兌





## 第一の序

「我れに支點を與へよ。然らば大地と雖も我れよく之を動かさん。」——數學の先達アルキメデスは斯う言つて叫びました。何と味のある言葉でありませう。私は綴り方教育に於ける此の支點を自己の内に見出だすべく、十幾年の間苦ししい心の旅を続けました。先年公けにした小著「生命の綴方教授」は、實にさうしたいたましい私の内面生活の記録でありました。

爾來歳を重ねることまさに六回、私は私の愛する子供たちを相手に、更に更に深い悩みの道を通つて來たのであります。今日茲に送り出さうとする「綴り方指導原論」と「綴り方指導體系」とは、私のさうした心境から生れたものでありまして、私にとつては實に過去二十年間に於ける、思ひ出ふかい悩みの記録であります。自ら顧りみて未だ世に誇るべき「支點」の何物もないことを恥ぢ入る次第であります。私自身の爲から言へば、將來に進むべき自分の道を



確かめ得たことを、むしろ喜ばねばならないと思ひます。本書の有つ缺陷その他に至つては、希くは皆様の御垂教によりまして、漸次に之をあらためて行きたいと思ふのであります。

若しそれ、私のこれまで経て来た大きな悩みが皆様の悩みに通じ、私の求め得た小さな喜びが皆様の喜びに合するところがあるならば、私は自分の望みの達せられたことを神に謝しなければなりません。

終りに臨んで、此の道のために同じ方向を目ざして進まるゝ幾萬の皆様へ、心からの敬意を表し、併せて其の幸福を祈りたいと思ひます。

樹々のよろこび春の雨降り出でにけり

昭和二年四月初稿終了の日

廣島市南竹屋町の寓居に於て

著 者 識

## 第二の序

自由選題對非自由選題の論争以後、我が國の綴り方教育者は珍らしい一個の壺を掘りあて、先づ喜びの第一聲をあげました。壺のおもてには幽かに「生活指導」の四文字が刻まれてあります。

そこで最近の綴り方教育界に於ける第一の話題は此の壺の話になりました。問題の中心は、此の壺の中味がどんなものであるかといふことに歸着するのですが、實は壺の蓋が容易に開かないので、みんなが弱つて居ります。子供は綴ることの無さに欠伸を催し、指導者は手を束ねて時を待つより外致し方ないといふ有様であります。

茲に捧ぐる「綴り方指導原論」一冊、及び「綴り方指導體系」八冊が、さうした人々のために多少とも何等かの力となることを得たならば、著者の喜びはこれに越したことはないと思ひます。



唯一言、最後に申し添へておきたいことは、私の此の著述は「原論」と「體系」の二つが揃つて始めて指導の精神が盡されるのでありまして、「原論」は言ふまでもなく理論篇、「體系」は即ち實際篇であると言ふことでもあります。故に「體系」を離れて「原論」なく、特に「原論」を離れては「體系」が活用の意義を失ふのであります。すべて實際は一つの形式であり、形式が精神をぬきにして用ひられる時、そこに恐ろしい教育上の悲劇が演ぜられることを思うて、そよろに此の婆心を禁じ得ないものがあります。皆様の御清鑑を祈ります。

著者 追 識

## 綴り方指導原論 目次

### 序 論

第一 最近の綴り方教育を論ず……………一

一 最近の綴り方教育と其の諸相……………一  
隨意選題提唱以後の綴り方―所謂課題主義の運命―隨意選題の長短と其の將來―最近の綴り方と其の諸相

二 最近に於ける綴り方教育の悩み……………二  
行き詰つた綴り方教育―悩みの根元は―一般に淺薄な經驗の羅列に終る文章が多い―生活の内面的な深みが足りない―それであるて教師は手の下しやうがない

第二 課題と隨意選題とを超越せよ……………三



一 課題の意義と其の變遷……………三三

型式主義を超えて—自由發表主義を超えて—寫生主義を超えて—所謂「課題主義」の破滅

二 隨意選題の由來と其の考察……………三九

隨意選題の由來—隨意選題の意義と其の考察—方法としての隨意選題—内面的悲哀と隨意選題主義の破産

三 課題と隨意選題とを超越せよ……………四四

課題を超えて—隨意選題を超えて—兩者の境界を取り拂つた世界—遙かに理想の高峯を望む

第三 指導體系を組織せよ……………五九

一 綴り方指導體系の必要……………五九

アルキメデスの言葉—今日の綴り方は支點を得ざる惱みに陥つて居る—之を救ふ唯一途のみ

本質論……………六七

第一 綴り方の意義及び目的……………六七

一 綴り方の意義……………六七

綴ることの意義と其の變遷—綴り方の根柢と綴り方の作用—結論

二 綴り方の目的……………七四

綴り方の目的—生活の表現—生活の向上進化

第二 綴り方に於ける生活と其の考察……………六六



一 生活の意義と其の諸相……………七六

生活とは何ぞ—外的(物質的)生活と内的(精神的)生活—内的生活の諸相—藝術的・科學的・實踐的・宗教的生活

二 生活の深み……………八二

外的生活と内的生活との關係—浅い生活と深い生活—内觀によつて生活を深めること、其の一例—結び

三 生活と綴り方……………九四

生活の深淺と文章の深淺—文章に於ける純眞乃至直覺の閃き—よい文章を得るの道—生活と綴り方との交渉—綴り方科即人生科

第三 綴り方生活の内面的考察……………一〇七

一 綴り方に於ける創作……………一〇七

創作の意義—創作の作用—創作と模倣—創作と所謂型の模倣

二 綴り方に於ける創作の過程……………一一三

創作の準備期と創作の完成期—準備期に於ける生活の營み—完成期に於ける創作の營み

三 創作と觀察想像思惟……………一二〇

觀察と感受性—觀察と直覺—觀察と反省—想像と思惟

四 創作と三昧境……………一二四

創作と三昧境—三昧境に入るの道—三昧境と環境の整理

五 創作と靈感……………一二七

創作の神祕性乃至偶然性—創作と靈感—靈感と努力

六 表現活動に於ける論理的規範……………一三六

表現活動の關門—科學的生活の表現と論理的規範—藝術的生活の表現と論理的規範 倫理的・宗教的生活の表現と論理



的規範—約結

第四 兒童の綴り方生活と其の發展……………一五五

一 取材の方面より見たる兒童生活の發展……………一五五

はしがき—藝術的生活と其の發展—科學的生活と其の發展  
—倫理的生活と其の發展—宗教的生活と其の發展

二 表現活動の方面より見たる兒童生活の發展……………一六五

はしがき—第一期に於ける兒童の表現活動—第二期に於ける兒童の表現活動—第三期に於ける兒童の表現活動—第四期に於ける兒童の表現活動—結び

三 結語—一覽表……………一九五

第五 綴り方に於ける文の見方……………一九五

一 文の見方……………一九五

指導論……………三〇九

第一 綴り方に於ける指導の根柢……………三〇九

一 綴り方に於ける指導の意義……………三〇九

二 所謂よい文章と其の考察……………二〇七

文の見方を研究することの必要—文の内容と形式—文章評價の標準

深みのある文—實感の文—純眞の文—觀察の細かな文—觀察の鋭い文—見方の面白い文—想像の豊かな文—簡潔な文—論理正しい文

三 所謂わるい文章と其の考察及び指導……………二八八

野性を暴露した文—觀察の足りない文—概念の遊戲に陥つた文—虚飾に陥つた文—其の他



指導の根本義―指導上の着眼点……………

二 綴り方に於ける指導の要項……………三二

綴り方に於ける指導の根柢―綴り方に於ける指導の要項……………

三 綴り方に於ける指導の方法……………三二六

その要領―綴り方の指導録―反省録……………

第二 綴り方に於ける着想の指導……………三九

一 綴り方に於ける題材意義……………三一九

素材と題材―題材を見つけることの真意義―誤まれる題材  
の見つけ方―題材は之を内に求めよ―題材選擇上考慮すべ  
き問題……………

二 綴り方に於ける着想の指導……………三三七

題材を内に見出だすには―鑑賞より創作へ―廣い意味の課  
題―文材手帳の利用―郷土歳事記の編製……………

第三 綴り方に於ける構想及び記述の指導……………三四三

一 綴り方に於ける構想の指導……………三四三

題材の掴み方といふ言葉―題材の纏め方といふ言葉―藝術  
的表現に於ける構想の指導―論理的表現に於ける表現の指  
導……………

二 綴り方に於ける記述の指導……………三五〇

構想と記述―記述と形式―記述に就いての指導……………

第四 綴り方に於ける文題命名の指導……………三五五

一 綴り方に於ける文題の意義……………三五五

文題の意義―文題をつけるのは作者の仕事―眞の文題は文  
章を生み出した後に於て慎重に決すべきもの―所謂課題主  
義の謬見―課題に於て開拓すべき新天地……………

二 文題のつけ方と其の指導……………三六二



文題選定の要領及び文題の具備すべき要件—藝術的生活の表現と文題—科學的生活の表現と文題—實踐的生活の表現と文題—宗教的生活の表現と文題—文題選定の指導—その方法与時期

第五 綴り方に於ける推敲の指導……………三七三

一 綴り方に於ける推敲の意義……………三七三

推敲といふ言葉の由來—文章と言葉—文章の獨自性と自處理—文章の普遍性と共同處理

二 綴り方に於ける推敲の指導……………三六一

指導事項と指導法—推敲指導の一例

第六 綴り方に於ける鑑賞及び批評の指導……………三九一

一 綴り方に於ける鑑賞の指導……………三九一

綴り方に鑑賞指導の目的—鑑賞の材料—鑑賞の意義と過程

二 綴り方に於ける批評の指導……………四〇八

—鑑賞の指導—鑑賞より創作への一例  
何の爲めの批評ぞ—他人の悩みを自らの悩として—批評の根柢—結び

第七 綴り方に於ける文話……………四二一

一 文話と綴り方生活……………四二一

文話の使命と價值—文話と綴り方生活

二 文話の實際……………四二四

文話の手段—文例に即して行ふ文話と其の實例—單獨に行ふ文話と其の實例

第八 綴り方に於ける描寫の指導……………四三七

一 描寫の意義及び諸相……………四三七



描寫の意義及び特質—描寫と擬人—自己描寫—その他の種々相

二 綴り方に於ける描寫の指導……………四五五

人物の描寫と其の指導—會話の描寫と其の指導—自然の描寫と其の指導—擬人の指導—自己描寫の指導

第九 綴り方に於ける説明乃至評論の指導……………五二〇

一 説明の文章と其の指導……………五二〇

説明の意義及び特質—綴り方に於ける説明の指導

二 評論の文章と其の指導……………五二七

評論の意義及び特質—綴り方に於ける評論の指導

第十 手紙及び日記についての指導……………五三五

一 手紙の文章と其の指導……………五三五

手紙の特色—手紙指導の機會—手紙と文話—手紙と鑑賞材料

二 日記の文章と其指導……………五四三

日記の特色—綴り方に於ける日記の指導

第十一 童謡和歌俳句についての指導……………五四七

一 童謡と其の指導……………五四七

所謂流行の童謡を葬る—童謡の本質—綴り方に於ける童謡の指導

二 和歌及び俳句の指導……………五五六

短歌の特質—短歌の指導—俳句の特質—俳句の指導

第十二 俳句を主材とした想像文の指導……………五七二

一 俳句と其の鑑賞……………五七二



想像の根柢としての形式的要素—想像の根柢としての内面的要素

二 指導の實際………

第一例(鑑賞より創作へ)—第二例(新傾向の句)

目次終

綴り方指導原論

田上新吉著

序論

第一 最近の綴り方教育を論ず

一 最近の綴り方教育と其の諸相

隨意選題提唱以後の綴り方—所謂課題主義の運命—  
隨意選題の長短と其の將來—最近の綴り方と其の諸相

- 1 -  
私は本書の首途に當つて、先づ最近の綴り方教育を大觀し、其の根柢に横たはる最も重要な諸問題に就いて端的に私の所信を述べ、以て此の小著に打ち込



んだ私の精神の所在と其の方向とを明かにして置きたいと思ふのであります。懐ふに先年隨意選題の主張が提唱されて以來、我が初等教育に於ける綴り方が、躍進的發達を促されて來たことは、實に刮目に値する出來事であります。特に其の中でも著しい進歩を遂げたものは、文章の本質ならびに綴り方教育の目的に對する見解で、從來の形式本位的な綴り方から一躍して今日の生活本位の綴り方にまで進んで來たことは、たしかに喜ぶべき現象の一つであると思ひます。たゞ指導の方法といふ實際上の問題になると、些か目的にそぐはぬものもあるやうだし、又子供の作品として發表されたものを見ると、そこには随分遺憾の意を表すべきものもあるやうであります。單に理論の點から申すならば、今日の綴り方教育は他教科のそれに比して、たしかに一日の長があると思ふのであります。

隨意選題の提唱によつて物の衰れをとどめたのは、所謂「課題主義」の綴り

方でありました。尤も其の當時に於きましては、所謂「課題主義」乃至「非自由選題」の主張も可成り猛烈でありまして、此等と隨意選題との論争は、少からず斯界の空氣を緊張させたものであります。結果から見ると、兩方とも根氣負けがしたのか、些か安價な方法上の妥協に落ちて行つたやうな憾みがあると思ひますが、しかしながら最も公平に評すれば、此の論争こそは所謂「課題主義」にとつて明かに其の運命を決せられた最後の奮闘であり、將に滅せんとする燈火の一閃であつたと思ひます。

當時「課題主義」乃至「非自由選題主義」の主張者が唯一の武器としたところのものは、「表現能力の陶冶」といふ題目でありましたが、此の題目こそは綴り方を一の技能科と見る、所謂「技巧偏重」乃至「型式主義」的謬見に基づくもので、今日の綴り方から見るとそれが如何に皮相な、且つ淺薄な見解であるかは、茲に言ふまでもないと思ふのであります。尤も「課題主義」と「非自由選題主義」とは當時味方同志ではありましたが、其の内容は必ずしも同一



ではないのでありまして、中には「擬古主義」乃至「型式主義」の傳統と見るべきものも這入つて居れば、又「自然主義」乃至「寫生主義」といつたやうな行き方も含まれて居るのであります。が、しかしながら其の目標とするところが、所謂「表現能力陶冶」の一點張りであり、やゝもすれば「生活」を離れて「表現」を説き、「心」を離れて「形」を云々せんとする傾向を有つて居たことは争はれない事實であります。此の點に於て「課題主義」乃至「寫生主義」は明かに過去の遺物であり、現在の私たちとは相隔る遠いものであると言はねばなりません。

一方「隨意選題」の主張はどうであつたかといふに、これにも亦一長一短がありまして、其の悉くを鵜呑みにするわけには行かないやうであります。即ち「隨意選題」の主張は、當時の形式的に行き詰つた、墮落し切つた綴り方教育界に向つて、一種の清涼劑を提供し、內的方面への覺醒を促した點におきまし

ては、其の功績實に偉大なるものがあつたと思ふのでありますが、何分にも其の立論が餘りに神祕的であり暗示的であつた爲に、其の眞意を捕捉することが甚だ困難であつたといふ點から、随つて方法上の問題に幾多の誤解を招き、疑問を残した形跡があるやうに思はれるのであります。

特に今日から其の主張を振りかへつてみると、最近に主張者自身も「一種の職工養成に陥つてゐた」と述懐して居らるゝ如く、その立論がやゝもすれば根本を離れて枝葉に走り、單なる方法論に終始した嫌ひがあつたやう思はれます。方法論としての「隨意選題」はむしろ未完成乃至不完全といふべきであります。そこには「文題」と「文材」との概念の混淆、或は「指導體系」の不備といつたやうな幾多の問題が残されて居るのであります。

之を要するに、「隨意選題」の主張は、綴り方の黎明期に於ける一大警鐘として、大いに傾聴すべきものがあつたと思ひますが、方法論としては今後更に研究すべき幾多の問題を残して居ると言ふべきであります。



さて「随意選題」對「課題」の論争以後、とにかく「形式本位」から「生活本位」にまで漕ぎつけた綴り方は、現在如何なる状態にあるかといふに、一言にして之を申さうならば、それは「混亂」の二字に盡きると思ひます。勿論、前にも述べた通り、文章の本質乃至綴り方の目的に對する見解は、大體「生活本位」といふことに多くの意見が一致して居るやうでありまして、「文章は作者の生活の表現である」とか、「綴り方教育の目的は文章に即して兒童の生活を指導するにある」とか言つたやうな言葉は、誰しもの口を突いて出るやうであります。さて一歩立ち入つて指導の實際を覗いてみると、其處には驚くべき新と舊との混淆があり、自覺と無自覺との雜居があると思ひます。

次にあげる二つの文例は、何れも最近私の目にふれたものでありますが、以て如何に今日の綴り方教育界に尙ほ「舊」と「無自覺」とが存在するかを有力に物語るものであると思ひます。

#### 英雄の末路

世にも英雄の末路ほど氣の毒なものが他にあらうか。恐れ多くも太閤殿下の取立の英雄、福島左衛門太夫正則公も其の一人である。關ヶ原の一戦にさしもの石田三成も歸らぬ旅立ちをしたのである。此の時は正則公は拔群の功があつたのであるが、かれをねらふ古狸は大阪の役後は一そう彼をねらつてゐた。してゐる内に豊臣氏は亡ぶし、自分はたゞ一人ぼつちのやうな氣がして、昔の太閤の御恩を忘れて徳川方についた事が彼にとつては、大きなあやまりであつた。がしかし思つても過ぎ去つた後どうすることも出来ない。此れを思へば、忠義の誠で大阪の役に花々しく戦つた眞田幸村、木村重成等の勇士に比ぶれば非常に劣つてゐる。思へば胸も張りさけんばかりになつた。徳川方から安藝や備後の四十五萬石をいたゞいたが、それも皆太閤のためと思はれた。今はこれまでとむほんを起し、遂に信州川中島に流されたのである。此れを思へばさしも大名々々とあがめられた福島



公も、今は露と消えたのである。(某校高一男)

親の恩

親の恩は山よりも高く海よりも深くあります。それはお父さんやお母さんが私どもをうんでそだて、下さつたのでありますから、私どもは親を大切に、お父さんやお母さんの言ひつけをよく守り、兄弟げんかをしないやうにしなければなりません。それで私はよくべんきやうして、えらい人になつて、親の恩をわすれないやうにしようと思ひます。それで親の恩をわすれないのは、よいおこないの一ばんはじめで、人がつくす道のもとになるのであります。(某校尋三女)

これ等はたしかに「課題主義」の殘壘から生み出された一つの悲劇であります。かうした題目に就いて記述を強ひらるゝ時、兒童は如何に迷惑を感じるか。如何に情けなく思ふか、全く同情の外はないと思ふのであります。さうかと思ふと、また次のやうな文章もあります。

二人の紳士

此の間の日曜日に、僕は三原に行つた。汽車の中は満員で、僕等は立つて居た。或る一人の紳士はそれに平氣で寢て居る。

一人の紳士はこちらにおかけなさいと僕をよんでくれた。僕は本郷から三原に行く間でもかう感じた。えらさうな風をしてゐる様な紳士よりも、親切な紳士の方を皆が信用するであらう。みんなの立つてゐるのに、平氣で寢て居る様な紳士は表面だけであるから、僕はだめだと思つた。(某校尋六男)

青月の夜

僕はふと目をさまして便所へ行かうと思つて起きて戸外に出た。

邊を見渡せば、月はこうくと照つて、物凄いやうな青い光を夜の下界に投げてゐて、靜かなることは深山のやうであつて、唯「リーン」「リーン」とみゝずの調に妖精の夜の芝生に舞ひ狂ふやうな物凄ゐ感に打たれる。小風はほうをかすつて「ひやり」と水をあびせかけたやうな氣がする。雨の



やうに垂れた柳は幽霊の亂れし髪のやうで、淋しさ一入身にしむ。(某校尋六男)

この二つの文例も亦最近に私の目にふれたものでありますが、此等は多分は随意選題の方法によつて生れたものであると思ひます。こゝで問題になるのは此の文が随意選題の方法によつて生れたかどうかといふ事ではなくて、此の文章の作者が如何にして此の作品を生んだか、更に其の生活の深さ如何、表現の態度如何といふことであります。私をして評せしむれば、前の「二人の紳士」の文章は、生活の内省に著しき不足を感じしめ、後の「青月の夜」の文章は、其の表現に著しき誇張粉飾を感じしめると思ひます。即ち前者は不熟と言ふべく後者は不真面目と評すべきでありませうが、内容の貧弱乃至空虚を感じる點に於ては、兩者共に共通であると思ふのであります。此等も、結局は指導者の手ぬかり、或は無自覺を物語るものではないかと思はれてなりません。

また、

### 題がない

先生が「今日は自由選題にします、何でも好きな題で書きなさい。」と言はれた。さあこれからいよ／＼僕等の舞臺だと思つたが、さて題がない！何を書かうか……あれやこれやと考へたが、一向適當な題が浮んで來ないので困つてしまつた。他の者はと見ると、皆それ／＼何か書いてゐる。あゝ題がないのはおればかりかと思ふと、頭が／＼鳴つて來た。仕方がないから「題がない」といふ題で書くことにした。(某校高一男)

此の種の行き方もこれまでたび／＼見せつけられたものでありますが、これは明かに随意選題の方法から生れた悲劇の一つであります。勿論かうした苦しみを兒童に體驗させることは無用なことではありませぬ。しかし、いつまでも苦しませることばかりが結構なことではないと思ひます。「題」——といふ言葉は一寸變ですが——題材が見つからないならば、如何にして之を見つめるかに大事な指導の鍵がひそんでゐると思ふのであります。かうした行き方が随意選



題の理想であるとは誰しも考へては居りますまいが、しかしながら隨意選題の方法が往々にして、かうした放任的なやり方に陥つてゆく傾向のあることに向つては、大いに警戒しなければならぬと思ひます。

之を要するに、最近の綴り方教育界は、その方法に於て全く混亂の状態に陥つて居ると思ふのでありますが、私は更に大局の上より之を觀察して、そこに横たはつて居る根本的な悩みを指摘し、進んで之が救済の方法を工夫してみたいと思ふのであります。

## 二 最近に於ける綴り方教育の悩み

行き詰つた綴り方教育——悩みの根元は——一般に淺薄な經驗の羅列に終る文章が多い——生活の内面的な深みが足りない——それでゐて教師は手の下しやうがない。

綴り方教育が行き詰つた——最近またこんな聲を聞くやうになりました。そ

れは果して對岸の火事を眺めた閑人の冷語でありませうか。それとも綴り方の指導に全く愛着のない人々の空言でありませうか。否、否、さうではない、私はむしろ此の聲こそ最近に於ける我が綴り方教育の底流に横たはる一大暗礁を如實に物語るものであり、眞剣にして且つ謙讓なる教育者の偽らざる苦悶の叫びであると思ふのであります。

然らば其の苦悶のタネは何處にあるか——私はそれについて次のやうな觀察を下したいと思ひます。

其れは近頃の子供の綴り方の多くが單なる續材の羅列、即ち半熟又は未熟の状態にある經驗乃至無感激な經驗をだら／＼と並べて居るにとゞまり、其の間讀者に向つて何等の感鳴を與へるでもなければ、生活の深みを味はせるでもない、たゞ「あいさうですか」と言つて引き下がるより外に仕方のない様な文章が非常に多いことでありませう。それにもかゝらず教師の方では其れ等の文章に對して殆んど手の下し様がない、即ち指導の見當がつかないといふのが最近



の實況であります。

かうした傾向は自由畫に於ても間々耳にすることでありますが、之は要するに自由教育が生んだ一つの缺陷であると思ひます。即ち、綴り方に於ては、先づ隨意選題の方法が第一に其の責を負ふべきであると思ふのであります。

想ふに、茲數年來、隨意選題の勃興と共に、子供の綴り方は如何にも伸び伸びとして参りまして、今日では大抵な子供が、自分の見たり聞いたり感じたりした事柄を、兎に角一通りはスラ／＼と書くことが出来るやうになりました。

これは一面から見てもたしかにいゝ事だ、單に表現能力といふ上から判断したならば、十年以前と較べて實に破天荒の進歩と申してよからうかと思ひます。

しかしながら、文章といふものは、それが單にスラ／＼書いて居る、文法の上から見ても誤りがない、といつただけで以て、直ちに之を推賞すべきではありません。其の内面に於て必ず、人を動かすところの大きな「或る何物か」が必要であります。

「或る何物か」——それは言ふまでもなく作者の「思想」であり「感激」であります。「生活の深み」であり「情熱」であります。今日の兒童の作品には、遺憾ながら大切な其の「或る何物か」が忘れられて居るのであります。例へば、試みに次の文章を読んでみて下さい。

遺 足

きのふは僕らの遠足でした。朝、ねどこの中から「お母さん、お天きはとおきゝすると、お母さんは「お天きですからはやくおきなさい。」とおつしやいました。それでぼくはよろこんではねおきました。それからかほをあらつて、きものをきかへて、ごはんをたべました、あまりうれしいので一ぜんしかようたべませんでした。「そんなに少したべては、おながへつてあるけん」とお父さんがおつしやつたので、また一ぜんたべました。それからしたくをすませて、中山くんをさそつて學校へ行きました。學校へ来てみると、もう大ぶんあつまつてゐました。まもなくかねがなつて、み



んなあつまりました。校長先生のおはなしがあつてから、山口先生のごうれいで、みんなならんで門を出ました。門を出る時には六年生が一ばんさきで、そのつぎが五年生、ぼくらは三ばんでした。大正ばしをわたつて、田のあぜを通つて、明じん山へのぼりました。山の上でべんたうをたべたら、大そうおいしいでした。かへりにつゝじの花をつつてかへりました。ばんには早くねました。(某校尋四男)

楽しい遠足

此の間から、早く来ればよい、早く来ればよいと思つてゐた楽しい遠足もいよ／＼今日となつた。今朝床の中で、「お母さんお天気は」と聞くと、「お天気です。」といはれたので、よろこび勇んでとび起きた。空を見るとなるほど日本晴のよいお天気なので、僕はすぐに顔を洗ひ、御飯をたべて遠足のしたくをした。そこへ山下君がさそひに来たので、一しよに學校へ行つた。學校に来てみると、先生はじめ、みんなにこ／＼顔で来てゐた。それ

からしばらく遊んでゐると、かねがなつたので、ならんで遠足に出かけることになつた。門を出て國道をまつすぐ西へ行つて、まづ平峰神社へさんけいした。それからかけ足で石だんをおりて、面ふの廣瀬山にのぼつた。山の上でいくさごつこをして遊んでから、みんなとべんたうをたべた。腹がへつてゐたので、大そううまかつた。それから又いくさごつこをして遊んだ。松元君がその時石をなげて内田君の足にあたつて血が出たので、先生にひどくしかられた。山を下りて學校へかへつた時は四時半ごろであつた。うちへかへつてから、さつそく風呂へはいつた。ばんにはくたびれた足をのばして一ねむりにねむつた。(某校尋五男)

修學旅行

私どもは昨日神戸へ旅行しました。朝三時頃に起きて、かみをいつたり、着物を着がへたりしてゐると四時が來ました。いそ／＼しながら、姉さんのおこしらへが出来るのを持つてゐました。が、なか／＼出来ないの



私は一足先へ行かうと思つて、内を出てまがり角の所まで行くと、藤原の榮さんが待つて居られました。私は大きなこゑで「榮ちゃん」とよびました。するとそこへ秋山先生が自轉車に乗つておいでになりました。先生は「もうおそいのだから早くおいでなさい。」とおつしやいましたから、私はかけ足で行きました。行く／＼先生はおいそがしいのに……と思つたら、先生のありがたさが心にしみ込みました。

驛に着いて見ると、もう皆さんは並んで居られました。やれ／＼と思つて私も列に加はりました。すこししてこゝから輕便で西大寺驛へ出ました。こゝで山陽線に乗りかへて、いよ／＼神戸へ向つて、ひた走りに走る事になりました。私は後からぼつ／＼乗りましたから、腰をかける場所がないので、あちこちをさがして居ますと、岡本先生がこちらの箱へお乗りなさいといつて下さいました。それで私は一箱前に行きました。そこも大分こみ合つて居ましたが、がまんをして腰をおろしました。

汽車は煙をのこしてすん／＼東へ東へ進みました。夢の中に私らを乗せて三石のトンネルに入りました。箱の中に煙が入つたのにはこまりました。トンネルを出ると、汽車は上郡の驛まで急な道を大急ぎで走つたので、氣持ちがよくありました。姫路、舞子、須磨、兵庫を過ぎて十時頃とう／＼神戸へ着きました。(某校尋六女)

右の三篇は何れも遠足乃至旅行を題材として綴つたものでありますが、一讀して別に文意の甚だしく晦澁なところもなければ、文法上許すべからざる間違ひと言つたやうな點も、別に見つからないやうであります。即ち、形式の上から申さば、流暢明快とまでは行かないにしても、先づは無難の作と評してよからうかと思ひます。たゞしかし、私の最も遺憾に思ふ點は、三つが三つながら所謂「遠足文」乃至「紀行文」の型——特に乾からびた讀本の文型に因はれてゐて、生き／＼した作者の個性が少しも現はれてゐないことであります。文章の何處といつて非難すべき程の疵が無い代りに、此處こそといつて讀者の心を



引きつける何物もないことあります。だらりとして飴細工の如く、味なきことと蠟を嘯むが如く、ごたくしてゐること古道具屋の店頭の如きものが、現代に於ける綴り方の一般的傾向ではありますまいか。文章としてこれほどいたましいことはなく、これほど情けないことはあるまいと思ひます。更に次の文章を御覽下さい。

昨日のこと

昨日の朝私は六時に目がさめました。それから顔を洗つて御飯をたべました。それから秋ちゃんのお守をしました。それから、ちいつとしておひるの御飯をたべました。それから又遊んで夕方になりました。又御飯をたべてねました。(某校尋四女)

畠打ちに行つたこと

僕は昨日お母さんと奥田の原へ畠打ちに行きました。畠を二枚打つてかへりました。ばんには風呂に入つてねました。(某校尋四男)

これ亦兒童の日常経験を綴つたものでありませうが、其の記述の概念的で、内容の空虚なことは、前に挙げた遠足の文以上であります。思ふに此等の作者は、経験内容としてはもう少し豊富なものを有つてゐたでありませうが、悲しいかな生活観照の態度が養はれてゐない爲に、あたら好材料を取り逃がしたのではありますまいか。こんな文章を見ると、世間ではよく「綴り方ではない、あづり方だ」と言つて一笑に附し去る傾向があるやうであります。思うて茲に至れば、兒童のため轉た同情に堪へない次第であります。

之を要するに、今日の綴り方教育は、今や非常な難關に直面してゐると思ひます。兒童の綴り方は、兒童各自の力で伸びられるだけは伸びて居る。けれども其れは外面的に伸びてゐるだけで、内への發展ではない。しかも兒童自身のかでは、今の處これ以上に伸びることは出来ない。但し、教師がもうちよつとどうかしてやつたら、兒童はもつと、内へ伸びるであります。——無論



教師自身でも其の邊に気がつかないので、ありません。百も千も承知はして居る、分り切つては居るが、それでゐて、どうにも手の下しやうがない。これが今日に於ける綴り方教育界の實相ではありますまいか。

さて、かうした内面的な行き詰りは、どうした原因によつて生れたか。それに就いて私は前に之が責任を先づ第一に隨意選題が負うべきであると申しました。が隨意選題以外の漫然たる課題も亦、當然其の責の一半を負ふべきであると思ひます。何となれば、漫然と文題を提出して兒童の綴るにまかせ、其の後に何等適當な指導の考慮を拂はなんだならば、それは放漫なる隨意選題と少しも選ぶところがないからであります。

隨意選題にしる課題にしる、徒らに其の主義の擒となつて、漫然之を兒童の綴り方に適用する時、そこには恐ろしい冒瀆があり、綴り方の墮落があると思ひます。内面的な行き詰りは、取りも直さず其處からはじまるのであります。かう考へて來ると、最早や隨意選題とか課題とか言つたやうな方法上の議論は

問題でありませぬ。要はもつと根本的な、もつと内面的なところに、指導の着眼點を進めて行かなければならない——そして其處から本當に子供の綴り方生活を上せしめるに足る指導法の組織を生み出さなければならぬ——そこに大きな問題が残されて居ると思ひます。而して此の問題を解決すること、それが今日に於ける最大急務であると思ふのであります。

## 第二 課題と隨意選題とを超越せよ

### 一 課題の意義と其の變遷

型式主義を超えて——自由發表主義を超えて——寫生主義を超えて——所謂「課題主義」の破滅

今日綴り方教育の底流に横たはる悩みを打破するために、私は先づ課題と隨意選題との超越を叫びたいと思ふのであります。その過程として一應課題の



由つて来たところの道すぢをあらまし述べておきたいと思ひます。

綴り方に於ける課題といふことは、随分早くからあつたもので、恐らくは文章あつて以來これに伴うてあつたものらしく考へられます。若し私の狭い見聞による想定を許さるゝならば、それは彼の支那古代に於ける詩の題詠乃至は中世以後に於ける科擧（進士の試験）などが、其の俑を作つたものかと思はれるのでありますが、そんなことはどうでもよいとして、先づ我が國の小學教育に於ては、彼の明治五年の學制發布當時から以後二三十年の間、殆んど全く彼の所謂「課題主義」によつて綴り方をやつてゐたやうに思はれます。

私どもの小學時代は所謂其の課題主義による綴り方の指導を受けたものであります。今から回顧してみると、その頃の指導——否教授は、一般に所謂注入式乃至型式主義でありまして、綴り方——當時は作文と言つて居ました——に於ても亦、極端に型の模倣を強ひられました。即ち、當時の作文に於ては、

先づ教師の方から文題が提出されると、生徒は之に對して書くべき内容を決定し、發表の形式を吟味しなければなりません。單にかう言へば、現今の綴り方と大した差異はないやうに聞えますが、しかし當時の作文の文題といへば、直ちに其の背後に或る模式的な文型、文の種類、内容といったやうなものが、約率的にくつついて居たもので、今日の所謂文題とは餘程ちがつたものであります。例へば「猫」といふ文題が出ると、其の文題は必ず「説明文」といふ文種、及び之に伴ふ文型を指示して居り、随つて其の内容としては所謂理科的記述要項を限定して居りました。形態、習性、效用といふ内容及びその排列順序は、理科的説明文に於ては、何時如何なる場合にも加除變更すべからざる不文律でありました。かくて、そこに生れた文章の見本は次の様なものであります。

猫

猫は虎類の動物にして其の形も亦よく相似たり。體には一面に毛を生じ、



爪は鋭くして尖り、常に趾中に藏す。齒も亦鋭し。故に生肉を食ふ。目は日中一直線状をなし、夜は廣く開きて物を見るに便なり。能く鼠を捕ふ。故に人家に飼養せらる。(某校高二男)

また「櫻花を觀るの記」と言ふ文題が出ると、それは所謂記事文の指示限定を與へたもので、同じく次のやうな文型ならびに内容を要求して居りました。

櫻花を觀るの記

春風一度び山野を訪るれば、百花悉く粧を凝らし、妍を競ふ。何れも美ならざるはなしと雖も、就中優美にして而かも高尚なるは櫻花なりとす。予一日閑あり、乃ち友人を促し、腰に一瓢を携へて某寺に清遊を試む。寺は櫻花の美を以て夙に近隣に鳴れり。早朝家を出で、寺に近づけば、境内花の雲に包まれたるが如し。予等乃ち靜かに山門をくゞり、境内櫻樹の間を逍遙すれば、其の風景の佳なる譬へんに物なし。こゝに於てか花下に適當の地を相し、蓆をのべて互に酒杯を献酬す。まさに羽化登仙の思ひあり、

興趣盡くる所を知らず。既にして暮色四邊にせまり、晚鴉啼を争ふ。乃ち驚きて山門を辭し、破屋に歸りて、後日のため之が記を作る。(某校高二男)  
もう一つ、「螢狩に誘ふ文」といふ文題は、言ふまでもなく書翰文を指示したもので、そこには前文、本文、末文の型をとつたへた次の様な文を要求したものであります。

螢狩に誘ふ文

文して申上げまゐらせ候。此の頃は暑さ日に増し酷しく相成り、御同前にこまり入り申候。就いては此の兩三日、昔に名高き宇治の川邊の螢狩、いと盛んにて候由聞及び申し候。みやびたる京童にまじりて、螢狩せんも一入興あることに候はん。御差支へ無之候は、明晩御妹様もろとも御越しいかゞに候や。先は御誘引まで、あらゝかしくかしこ。(某校高二女)

綴り方は兒童の生活の表現だといふ叫び聲の高い今日から見ましたならば、右のやうな文章が、當時高等二年の子供の作品として、どれだけ其の作者の生



活に交渉を持つて居るでありませう。考へれば考へるほど滑稽であります。特に「櫻花を觀るの記」に至つては、其の最も甚だしいものであると思ふのであります。しかしながら其の當時の時代に於ては、之を少しも不自然乃至滑稽とは感じて居なかつたのであります。蔗をのべて、互に酒杯を献酬するあたりは高等二年（唯今の尋六に相當します）の小學生として、果して自然な生活であるか、またさうした事が果して事實あつたのであるか——といつたやうな事を考へる餘裕なしに、唯此の種の文章としては是非なくてはならぬ道具立てとして此の一句をどんなに推賞し喝采したことでありませう。ですから、當時の作文に於ける作者の苦心は、どうしたら自分の生活を如實に表現し得るかといふことではなしに、どうしたら先生から出された文題に適する文型と内容と而して美しい語句とを拉し來ることが出來ようかといふ點にありました。當時作文の上手と言はれる程の者は、其の殆んどすべてが多くの文型を暗記し、多くの文種を知的に辨へ、多くの美辭麗句を蒐集記憶してゐる連中でありました。随つ

てさうした連中の机上には、必ず「記事論說五千題」とか「美文の資料」とか言つたやうな種本が、虎の子の様に秘藏されてゐたことは、今頃の所謂學者先生の書架に洋書が秘藏されてゐると少しも變りませんでした。一方、教師の方でも亦此の種の文型、文種といつたやうなものを外的なペロメーターとして生徒の作文を評價したことは言ふまでもありません。若し生徒の作文に於ける記述の内容や順序が、萬一其の標本たる文型に合はないやうな事がありますとたとひ其の文章自體がよく出て來てゐるとしても、それは「題外れ」として無下に退けられて、「文辭佳なりといへども惜しむらくは題に合はず」などいふ評語をよく頂戴するものであります。此の時代の綴り方を、後代の人が「型式主義」と申したのは、誠に謂れのあることであると思ひます。

以上は綴り方に於ける課題の極く初期のことでありまして、つまり最も極端な、窮屈な課題の實相であります。かくの如き綴り方が今日から見て唾棄すべく排斥すべきものであることは、茲に言ふまでもありません。



課題の意義が最も窮屈に解釋され實現されてゐたのは、今も申しました通り我が國の綴り方では先づ其の初期のことでありました。

次に明治三十年代になると、樋口勘治郎先生の高唱による「自由開發主義」の教育が一しきり盛んに流行いたしました。綴り方では所謂「自由發表主義」の作文が行はれました。當時樋口先生の講演されたものを蘆田惠之助氏が筆記して出版されて居ますが、數年前蘆田氏が所謂隨意選題を提唱された時、私は此の事實を思ひ合せて成る程と感じました。それ程此の自由發表主義と隨意選題とは深い因果の關係に繋がれてゐる様に、私には思はれてならないのであります。此の自由發表主義といふのは、名は自由でありましたけれども課題は依然として課題でありました。此の點から見れば、自由發表主義も亦一種の課題主義でしかなかつたのであります。けれども課題は同じ課題ながら、前の型式主義のそれに比べると、内容の方面に著しい自由の天地が許されました。

類型的な、約束的な内容と形式が一擲されて、さうした煩はしい束縛から解放されました。此點實に彼の近代文學思想に於ける浪漫主義の勃興と其の軌を一にしたものであります。約言すれば課題の意味の擴張であり、進化であつたのであります。

前にも述べた通り、型式主義時代の課題に於きましては、出された文題其のもの、背後に、直ちに之に伴ふ文種、文型、内容といふものが決定的に豫想されたのであります。自由發表主義の課題になると、文題を提出するのは矢張り教師の仕事でありましたけれども、併しながら出された文題そのものは必ずしも文種、文型、内容等を限定しませんでした。例へば「梅」といふ文題に對して、型式主義時代ならば直ちに梅の理、科的、説明文を豫想したものでありますけれども、此の時代に於ては必ずしも説明文を要求しないので、兒童の方では勝手に説明文でも、記事文でも、論文でも、自分の好きにまかせて内容を選択し記述したものであります。で、或る兒童は梅の理、科的、説明を書くかと思ふと



他の或る兒童は梅見に行くの記を書く。更に或る兒童が梅花の清香に對する感想を書けば、他の或る兒童は我が家にある紅梅の由來を書く。——といったやうな調子で、そこには極めて自由な内容が自由な形式に盛られたものであります。だが、かうは言ふものゝ、當時は世間の文章のすべてが、型に囚はれてゐて獨創の少かつた時代であります。随つて兒童の作文の内容が自由で、形式も亦自由だと申しましたが、その自由たるや、矢張り囚はれた文型から一步も踏み出したものではなく、有り體に言へば課題の要求を無視して、之によつて聯想さるゝ他の文種、文型に走つたといふだけのことであります。だから側面から見れば課題の進化であります。課題そのものから言へば一種の破壊であり、反逆であつたのであります。自由は同じ自由でも、今日言つてゐるやうな自由とは、餘程その内容を異にしてゐるのであります。

以上は綴り方の第二期に於ける課題の意味の解釋と、その實際上の有様を述べたのでありますが、さてさうした意味の課題を本にして子供の綴り方を指導

して行かうと考へた時、そこには幾多の難關がありました。先づ悲しいことには、當時教師の頭そのものが、まだ従來の型式主義から脱却すべく、餘りに無力であり、無修養であり、無自覺でありました。況んや教師以外の者の頑固さ加減は推して知るべきで、それ等が一緒になつて散々に學校の作文の新傾向を罵倒したものであります。——そんなに勝手なことを書かせて作文の力がつくか。此の頃の子供は、尋常科を出て手紙一つ書けぬではないか——といったやうな手痛い抗議が方々から持込まれました。恰かも明治維新前後に於ける新舊思想の衝突そのままの状況でありました。それに、ちやうど其の頃、文壇では長谷川二葉亭、山田美妙氏等によつて企てられた口語文——言文一致體——の試みが、漸次流行を見るやうになり、それがまた小學校兒童の作文にぼつぼつ這入つて来るやうになりました。さなきだに亂れかゝつた兒童の作文は、こゝにいよいよ亂脈となつて、當時の大人から見ると支離滅裂、混亂又混亂、まさに收拾すべからざるものとなつてしまひました。そこで社會の抗議は益々甚



だしくなる。教育者の中でも頭の固い方がそれに共鳴する。遂に「自由發表主義は兒童の作文を毒するものなり」といふ宣言が方々に火の手を擧げて、折角進みかけた綴り方教育は、茲に再び逆轉の悲運に際會したのであります。

その直後、綴り方教育の立て直しをするために、型式主義の修理的改良が行はれたり、或は獨逸流の作文教授法の移入が試みられたりして、開拓の鉞は打ち込まれましたが、それ等は結局ものにならないで終りました。かくて明治もいよいよ押し詰つた四十五年の頃から、あけて大正二三年頃にかけて、綴り方は茲に第三期への躍進を遂げたのであります。それは言ふまでもなく、彼の寫生主義的綴り方の提唱が唯一の導火線となつてゐるのであります。

寫生主義の綴り方を主張したのは、御承知の通り駒村徳壽、五味義武の二氏であります。私は同じ傾向の先手を打つた友納友次郎氏を加へて、寫生主義的綴り方の主唱者と呼びたいと思ひます。——尤も、此の説には友納友次郎氏

は不服と見えまして、何時ぞや或る席で自分は寫生主義者でないと辯ぜられたとか言ふことでもあります。氏の心持は私にもよく分ります。で、私は友納氏の主張が全然駒村五味二氏の主張と同一だとは申しますまい。併しながら、友納氏が其の著書に發表されたところ、駒村五味二氏の主張との間に、多くの類似點——むしろ共通點の存在することは、凡そ十目の見るところ、十指の指すところ、決して間違のない事實であると思ふのであります。

さて此の寫生主義的綴り方の立場から、課題といふことを考へて見ますと、それはまた餘程興味ある問題で、私は茲に課題の意味の更に、進化したことを喜ばずには居られませぬ。友納氏などは其の名著「讀方綴方の新主張」の中にも、文題と文材との區別を明快に論破されて居りまして、此の點では自由發表主義時代の文題觀から、たしかに一步を踏み出して居ると思ひます。寫生主義的の行き方に隨へば、教師が兒童に與へるものは文題ではなくて、むしろ材料でありました。否、材料と言はんよりは、素材と言つた方が、より適切であ



りませう。教師は黑板上に文題を書き示すか、はりに、或る動作を示したり、掛  
圖、標本の類を見せたりしました。又子供自身に或る種の動作をやらせてもみ  
ました。場合によつては、野外にも引出し、町の辻にも立たせました。かうし  
て多くの素材を子供の眼前に提供し、そこから題材を掴み、之を文に組織する  
方法をいろいろと指導したものであります。これが寫生主義的綴り方の主張の  
具體化ともいふべき實相でありまして、此の行き方は課題と言ふよりは、寧ろ  
別途の方案によつて、指導組織の立て直しを試みたと言つた方が、よく當つて  
居るやうに思はれるのであります。此の點から見ても、隨意選題の提唱當時、世  
人が五味氏や友納氏を單純に課題主義者扱ひにしてしまつたことに對しては、  
むしろお氣の毒に感ずるのであります。友納氏も其の後の著書の中に、「自分は  
課題主義者ではない」と辯じて居られるやうであります。これには私も同情  
いたしたいと思ひます。

尙ほ少しく餘談に入りますが、茲で寫生主義的綴り方教授の特色とも言ふべ

き方面を考へてみると、其れは、何れもが彼の浪漫主義文學の後に起つた自然  
主義文學の歩んだ道をそのまゝに、現實的、科學的の人生觀、乃至創作態度に  
立脚に立脚してゐること、前者からは生活表現といふ文章の本質に對する根  
本的理解が誘導され、後者からは論理的教材排列、乃至論理的綴り方系統案な  
るものが生れたのであります。これが友納氏の主張及び指導組織と、駒村五  
味二氏のそれと類似し、或は共通する點であります。なほ綴り方を一種の技能  
科と見做して、其の目的の大部分を技能の習熟練達におき、教材に一々練習目  
的といふものを掲げて指導を試みたところにも、共通の點を認めたいと思ふの  
であります。なほ此等の主張の是非に就いては、論ずべき幾多の問題が残つて  
居ると思ひますけれども、それ等は「課題」といふことゝ直接に關係がないこ  
とだし、且つそれ等の問題に就いては、前に拙著「生命の綴り方教授」の中に  
も可成り詳しく評論したことでありますから、茲ではそれを省略いたしたいと  
思ひます。もう一つ、當時寫生主義の主張者であつた五味氏は、その後暫らく



沈黙して居られました。が、數年前更に面目を一新した綴り方教授の著述を公にされて、昔日の氏でないことを表明されました。併せてこゝに附け加へておきたいと思ひます。

以上述べたところによつて、私は「課題」といふものゝ意義、内容、及び其の變遷進化に對して一通りの考察を終へたつもりであります。之を要するに「課題」といふことは、その出發の當初——型式主義時代——に於てこそ、極めて窮屈な内容を以て、兒童の表現に拘束を加へたものであります。さうした意味の所謂「課題主義」は、課題の意義の變遷と共に漸次其の本來の面目を失ひ、特に寫生主義の發生から隨意選題の提唱に及んでは愈々其の影をひそめて遂に破滅の現狀に立ち到つたことは、課題主義そのものから言へば悲しいことかも知りませんが、綴り方教育の上から見ると、まさに喜ぶべき現象であると思ふのであります。

## 二 隨意選題の由來と其の考察

隨意選題の由來——隨意選題の意義と其の考察——方法としての隨意選題——内面的悲哀と隨意選題主義の破産

次に隨意選題の由來と其の考察に移り、以て此の章に於ける私の主張の前提を了りたいと思ふのであります。

隨意選題の主張が、其の源を遠く課題主義の第二期——即ち樋口氏の自由發表主義に引いてゐることは、前にも一寸述べたところでありました。當時樋口氏の主張は、教育界に於ける一種の偶像打破で、氏は其の根柢に流るゝ自由啓蒙の思想を綴り方の上に適用して、之が革新を試みたのであると思はれますが、蘆田氏の隨意選題も全く之と動機を等しくして居るやうに考へられるのであります。しかも樋口氏の「自由發表主義」が「課題主義」に對する反抗であつたのに對して、蘆田氏の「隨意選題」の敵が矢張り同じく「課題主義」であるこ



とは、所謂「課題」の意義内容の變遷した今日、些か奇異の感に打たれざるを得ないのであります。特に「課題も自由選題の一種である」など、妥協的な言辭を述べらるゝに至つては、世人から「隨意選題は二十年以前の自由發表主義そのまゝの再來である」と言はれても、辯解の辭はあるまいと思ふのであります。

がしかしながら、私は暫らく之を善意に解釋して、とにかく蘆田氏の主張した隨意選題の根柢に、浪漫主義以後の文學思潮、特に自然主義に代つて現はれた新浪漫主義乃至人道主義の思潮が流れてゐると思はれる點に向つて、換言すれば、氏の主張が子供の現實生活に即して、之が内面的向上をはかり、且つ子供の個性乃至自由の尊重を叫んで居ると見らるゝ點に向つては、滿腔の敬意を表したいと思ひます。氏の言つてゐる「綴り方は子供の人生觀の閃きである」とか、「余の隨意選題は余のみ知る」とか言つたやうな言葉も、たとひ其れが世

評の如く多少神秘的な不可解な表現であるとしても、私は之を一個の蘆田氏の藝術と見て、氏の心持は幾分か分るやうな氣がするのであります。

たゞ一つ、此處に合點の行かないのは、所謂「選題」といふ言葉の意味であります。これは文の材料、即ち作者の生活を意味するのであるか、或は文の題目即ち文題を意味するのであるか、そこらの消息が甚だ曖昧であります。同時に「文題」といふ言葉も餘程變擬子に使はれてゐて、「文題をさがさせておく」などいふ氏の方法上の説明を見ますと、どうやら其れは文の材料を意味してゐるやうに受取けとれますが、なほ兒童の成績その他を参考して更に穿鑿してみると、どうやら其所には文題と文材との概念の混淆が存して居るやうに思はれてなりません。此れは蘆田氏のみならず、一般に隨意選題乃至之に近い方法をとつてゐる人々の間にも、此の種の誤解があるやうであります。綴り方教育の上から見て、まことに歎かばしいことだと思ひます。若し文の材料を子供の自由選擇にまかせるといふのであるならば、「隨意選材」の名辭こそ最もこれ



に相應しいものではないかと思ふのであります。

さて方法上の問題として隨意選題の行き方を眺めて見ますと、そこには指導の實際から見て幾多の疑問が生れて來ると思ひます。先づ「何でも書け」と子供に言ひ渡して、「書くことがありません」と子供が訴へて來た時、「書くことがないなら、そのないことを文題にしろ」と之を押へることは、隨意選題の慣用手段で、特に綴り方に冷淡な先生ほど此の手を多く用ひてゐるやうであります。これが子供にとつて如何に鬼門であるかは、前にも兒童の文例をあげて論評したところでありました。勿論一二次かうした苦しみを體驗させることは決して無意義なことではありませんが、しかしながら、其の背後に於て、何處に文の題材を求むべきか、「如何にして題材を掴むべきか」の指導を忘れてはならないと思ひます。次に「何でも書け」、「すきな事を勝手に」と子供を追放して、そこに何等の焦點を指示しないことになる、子供はとかく薄つべらな

表面的生活の記述か、さもなくば未熟生硬な素材のままの羅列に陥つてしまつて、大事な内面生活の向上が裏切られることになつてしまひます。時によると人間の暗黒面を誇り顔に書いたり、或は他人の作品の焼直し乃至剽竊に陥つたりするやうな危険性も、そこから派生して來ると思ふのであります。今日世人が隨意選題を目して一種の自然主義に墮したと評してゐるのは誠に謂れのあることで、今日の綴り方の行き詰りも亦そこらの點にあることは、前に述べた通りであります。指導體系の組織をおろそかにしてゐるといふことも、たしかに隨意選題の有つて弱點の一つで、中には之が組織を否定してゐる人もあるやうであります。これ等は多分指導そのものゝ本義に對する解釋の相違から來て居るのでありませう。勿論從來の指導組織を以て、今後の兒童を指導しようとすることは、大なる時代錯誤であると思ひますが、しかしながら古きを破壊して、之に代るべき新しい指導法を發見しないといふことは、誠にさびしい事であらねばならぬと思ひます。



之を要するに、隨意選題の主張は、其の出發に際してまことに高價な或る物を有つて居たやうに思はれますが、其の後之が實際の上に適用するに至つてだん／＼に其の「或る物」が失はれて来て、遂に今日の行き詰りを招致したかに觀せられるのであります。特に著しく私たちの目に映するものは、内面的の行き詰りで、此の意味に於て隨意選題の綴り方は、まさに「内面的悲哀」に陥つたと申すべきではありますまいか。しかも隨意選題を唯一の方法として綴り方に向つた人々にとつては、之こそ重大なる危機の到來を指示したもので、換言すれば、所謂隨意選題主義(?)は、今や正に破産の運命に頻してゐるわけでありませぬ。而して隨意選題の主張が、其の出發に際して反響の大きかつただけ其れだけ、最後も亦悲壯の感一層深きものあるを感ぜざるを得ませぬ。

### 三 課題と隨意選題とを超越せよ

課題を越えて——隨意選題を越えて——兩者の境界を  
取り拂つた世界——遙かに理想の高峯を望む

そこで今度はいよ／＼私の立場を述べるべき段取になりました。私の立場は言ふまでもなく、「課題と隨意選題とを超越」して、そこに私の理想とする綴り方の境地を開拓したいといふ念頭に基づくものであります。

随つて私の進んでゆく道は、所謂課題主義の道ではありません。教師が文題を提出して兒童に綴らせるといふことは、試験の意味に於てなら或は僅かに許さるべき場合があるかも知れませんが、之を以て綴り方指導の常道とすることは甚だしき冒瀆と言はねばなりません。文題とは文の名目の意味で、恰かも人の名の如く、産みの親たる作者が自分の作品に相應はしき名辭を選んで之を附けるべきものあります。人の名に於ける、名あつての人ではなくて、人あつての名であります。文と文題との關係亦同様で、文章生れて後はじめて之に適當な文題が決定さるべきだと思ひます。(此の事については、後に更めて「文題の



つけ方と其の指導」指導論第四の條下に詳論したいと思ひます）  
たゞしかしながら、兒童の生活に或る種の範圍又は焦點を指示して、之を内省せしめ更に表現せしめることは、敢て差支へないことで、これは從來の所謂課題主義の行き方とは自ら別個のものであり——無論隨意選題でもありません——同時にそれは價值ある指導の一面であると確信してゐるものであります。例へば、私が今兒童に向つて「夜の光景氣分」を題材として綴るやうに命じます。さうすると、さうした體驗は勿論兒童の生活の中にあるのでありますから兒童はめい／＼靜かに自分の生活を内省します。しみ／＼とさうした生活を思ひ浮べます。——こんな場合、私は多く四五日前に豫告することにして居りますから、豫告後に得た體驗を主材とする兒童もあることは勿論であります——さうしていよ／＼綴るべき時間が來ると、もう一べん反省してまとめます。次にあげる文章は、私の兒童がさうして綴つたものであります。

夜の道

空には一めん星がかゞやいてゐる。向ふの木の上に出てゐる月が、僕と一しよに歩いてゐる様に見える。「ちん／＼こうつ」と電車が走つて行く。時々いなびかりのやうに「ピカツ」とまつくらな道が青く光る。電車通へ出ると、後の方から二つの目玉がいきほひよく走つて來て、僕を追ひこして「ぶう」と言ひながら、向ふの小路へきえてしまつた。ふと氣がついて空を見ると、さつきの月がやつぱり僕について來る。僕がとまると月もとまる。「をかしいなあ」と思ひながら僕は又歩き出した。（尋三男）

夜中

ふと目がさめました。あたりはしいんとして水を打つたやうです。たゞ時計の音が、かつちん／＼と聞えて來ます。妹やお母様のおとこの中から、すう／＼といふねいきの音がきこえます。だしぬけに「にやあを」といふ猫のなきこゑが聞えたかと思ふと、今度はがた／＼といふ音がしました。きつと猫がしやうじのやぶれからとびこんだのでせう。その音が耳にはい



ると、私のあたまで中には、すぐに猫のかほがうかんで來ます。この間のことでした。おさしきにぬぎすてゝおいたス、エ、ターの上で、あの猫がどこからくはへて來たのか、一びきのお魚をたべたと見えて、ボケツトのへんを、大そうよごしてゐました。今夜はなにもないから、そんなしんばいはいらぬ、などとかんがへてゐるうちに、とう／＼ねむつてしまひました。(尋三女)

さむい晩

外へ出ると、つめたい風が吹いてゐました。空には星がきら／＼とかゞやいてゐます。歩いてゐると、一けんの家の中から「寒いろう」といふこゑがしました。耳をすますと、つゞいてパチ／＼と火をおこす音が聞えて來ます。買物をすまして、かへりがけに、めいどうの前を通ると、こんもりとしげつた木の間から、電とうが一つ、さむさうに光つてゐるので、思はず身ぶるひをしました。(尋三男)

私が最初兒童に提出したのは、取材の範圍を指示した要求で、決して文題ではありません。兒童の經驗は御覽の通り一人々違ふので、随つて文題も亦めい／＼異なるわけであります。此の文題は、兒童各自が、それ／＼自分の文章に適當なものを選んでつけたのであります。

又、次の文章は、「雪がふつた時のことを」と要求して綴らせた一年生の作品で、文題は勿論兒童各自がつけたものであります。

ユキダルマ

キノフ ハ ユキ ガ ツモツタ ノデ、トナリノ サトルクン ヤ、  
 一ラウクン ト ボク ノ ウチ デ、ユキダルマ ヲ コシラヘテ ア  
 ソビマシタ。  
 ハジメ ニ ボク ガ ニギリメシ ヲ コシラヘテ、ソレ ヲ コロガ  
 シテ、スコシ 大キク シマシタ。ツギ ニ 一ラウクン ガ マタ コ  
 ロガシテ、モウスコシ 大キク シマシタ。ソノ ツギ ニ サトルクン



ガ、カハツテ、コロガシマシタ。ソレカラ、三人ハ、ツメタイ、テ、  
 フ、ブウブウ、フキナガラ、カハルガハル、コロガシテ、キルウチ、ニ、  
 ヒトリデハ、オモタク、ナツタ、ノデ、コンドハ、三人デ、一シヨ、ニ、  
 ナツテ、コロガシマシタ。ニギリメシ、ハ、ドンドン、大キク、ナツテ、  
 シマヒ、ニハ、ボク、ノ、カラダ、ホド、ニ、ナリマシタ。  
 「コレ、デ、カラダ、ハ、デキタ。コンド、ハ、アタマ、ヲ、コシラ、ヘ、  
 ヨウ。」

ト、ボク、ガ、イヒマシタ。コンド、ハ、サトルクン、ガ、ニギリメシ、  
 フ、コシラ、ヘテ、ソレヲ、コロガシマシタ。ソノ、ウチ、ニ、アタマ、モ、  
 デキタ、ノデ、カラダ、ノ、ウヘ、ニ、ノセマシタ、ガ、ウマイ、デア、  
 イ、ニ、ツキマセン。ナンベン、モ、ナンベン、モ、コロガリオチル、ノ、  
 デ、コマツテ、キルト、ソコ、ヘ、オトウサン、ガ、オイデ、ニ、ナツ、  
 テ、アタマ、ヲ、ツケテ、クダサイマシタ。

「コンド、ハ、メ、ヲ、ツケヨウ。タドン、ガ、アルカ。」  
 ト、サトルクン、ガ、イヒマシタ。  
 「ボク、ガ、モツテ、クル。」  
 ト、イツテ、一ラウクン、ガ、タドン、ヲ、トリ、ニ、ハシツテ、イキマシ、  
 タ。

「ボク、ハ、スミ、ト、ビゲ、ヲ、モツテ、クル。」  
 ト、イツテ、サトルクン、モ、ハシツテ、イキマシタ。  
 ソノウチ、ニ、一ラウクン、ハ、タドン、ヲ、二ツ、モツテ、キマシタ。  
 サトルクン、ハ、スミ、ト、シユロ、ノ、ケ、ヲ、モツテ、キマシタ。イ、  
 ヨイヨ、ダルマ、ノ、カホ、ヲ、ツクル、コト、ニ、ナリマシタ。ボク、  
 ガ、ホウチヤウ、ヲ、モチダシテ、メ、ノ、アナ、ヲ、ホルト、一ラウク、  
 ン、ヘ、ソノ、アナ、ヘ、タドン、ヲ、ハメコミマシタ。ツギ、ニ、サト、  
 ルクン、ガ、マタ、ホウチヤウ、デ、クチ、ノ、アナ、ヲ、ホツテ、ソノ、



アナヘスミヲハメコミマシタ。ソレカラマタ、ボクト一  
ラウクンガ、シユロノケヲカタホウヅツハメコンデ、ヒゲ  
ヲツケマシタ。

「オオウマクデキタゾ。リツバナダンナサマダ。」  
トオトウサンガオワラヒニナリマシタ。

ケサオキテイツテミタラ、ソノユキダルマハクビガカタ  
ムイテ、ヒゲガオチテキマシタ。(尋一男)

ユキフリ

アサカラユキガフツテキマス。ワタヲチギツタヤウナ  
ノガ、クルクルマヒナガラデメンヘオチタカトオモウト、ス  
グキエテシマヒマス。アトカラアトカラト、スヒコマレルヤウ  
ニキエテシマヒマス。

オモテヲトホル人ハ、タイテイマントヲキテ、カラカサ

ヲサシテキマス。カラカサノウヘニモユキガツモルノ  
デ、マルデ、シロイカサヲサシテユクヤウデス。  
ムカフノホウハユキフリデボンヤリミエマス。イヘト  
ヤナギノ木ダケガクロクミエマス。(尋一女)

ユキノフル日

ユキハスコシモオトヲタテズニフツテキマス。マド  
ノソトノツバキノハガ、イツノマニカマツシロニナ  
リマシタ。カゼガフクト、ハナビラノヤウナユキガ、トキド  
キマドカラオザシキノ中ヘマヒコンデキマス、ソノタビ  
ニ、オコタノ上ノネコガ、サムサウニハナノ上ニ  
シワヲヨセマス。

オヒルスギヨソカラカハツテイラシタオトウサンガ、ゲンカン  
デバタバタトマントノユキヲオハラヒニナルト、ゲン



カン ガ ユキダラケ ニ ナリマシタ。ソノ トキ オトウサン ヲ  
ミマシタラ、オトウサン ノ ハナ ノ サキ ガ マツカ ニ ナツテ  
キタ ノデ、ミンナ デ 大ワラヒ シマシタ。(尋一女)

もう一つ、次にあげるのは、「失策の刹那の心持」を捉へて書かせたものでありますが、さうした経験體驗の一つや二つはどの児童も持ち合せて居りますから、そこに着眼の焦點を指示して内省記述させたのであります。學年は尋四、私は此の文章を綴らせる五日前に、子供に向つて次のやうに尋ねてみました。

「皆さんは此れまでの中にこんな経験はありませんか。自分で何か大きい失策を仕出かしたり、或はひどい目にあつたりして、どきんと胸をつかれた様な心持——驚きと悲しみと腹立たしさとがごつちやになつたやうな心持を感じたことは?……」すると、児童はみんな「ある」と申します。「ではさうした経験をふりかへつて、適當な材料をつかまへて來て下さい」といつて書かせたのが次の作品であります。

灰かぐら

「しまった」と思つて後を見た時には、もうおそかつた。火鉢の中からは、もうくくとふんかざんの様に灰かぐらが立つてゐた。やかんが火鉢の中へひつくりかへつたのである。僕はびつくりして、今まで手にもつてゐた箒も、帯にはさんでゐた弓矢も、みんなそこへ投げ出して、青くなつてやかんを引き起さうとしたが、あつくてく手のつけやうがない。そこへお母さんがおいでになつた。

「どうしたの」

「矢がさはつて、やかんがひつくりかへつたんです。」

「まアけがなくてよかつたわ。これからは氣をつけなさいね。」

お母さんはかういつて、やかんをもとのやうにして下さつた。僕はほつと安心した。(尋四男)



おとし穴

どすん……「あッ」……僕は思はずかう叫んでひやつとした。気がついてみると、僕は穴の中の水だまりに足をふみこんで、今朝買つて貰つたばかりの下駄が泥だらけになつてゐる。「しまつた」と思つたがもう遅かつた。僕はまんまと友達のけいりやくにかゝつたのだ。向ふを見ると、友達のいたづら坊が後をふりかへりく、「うまく行つたぞ」といふ顔をしながら逃げてゆく姿が小さく見えてゐる。(尊四男)

以上はほんの一二例に過ぎないのでありますが、之を要するに私は彼の舊式な所謂「課題主義」から脱却して、あくまで兒童の生活を土臺とし、時に或る種のヒントを與へて彼等の綴り方生活を根柢的に導かうといふのであります。此の意味に於て私の綴り方は之を「超課題主義」と申してよいかと思ひます。

私はまた隨意選題主義の捧持者ではありません。随つて隨意選題を唯一無二

の道として、そのみを以て綴り方指導の全部となす人々には到底加擔が出来ないのであります。しかしながら、兒童各自に隨意に題材を選ばせて書かせるところの、所謂「自由作」は、指導の一方法として之を取入れるに吝なるものではありません。又私は敢て「文題をさがしておけ」といふ命令は下しません。が、「書くべき事柄を何日まで考へて準備しておけ」といふことは命じます。隨意選題の行き方と内容は同じかも知れませんが、私はどこまでも文題と文題とを區別して兒童にも臨みたいと思ふのであります。之を要するに、私は隨意選題の歩いた道を、時に歩くことはありますが、それは指導上の一方便に過ぎないのであつて、決して全部ではありません。而して更に一方では、周到なる注意のもとに指導體系を組織し、隨意選材の上にも之が適用を可能ならしめて以て、今日の綴り方に於ける最大缺陷たる、内面生活の深みへの指導を達成したいと思ふのであります。此の意味から言へば、私は行き方は一面から見て之を「超隨意選題主義」と呼んでも、敢て差支へなからうと思ひます。



これまで隨意選題の主唱者は、自分の道が課題より遙かに自由な、むしろ絶對的に廣汎な領域を有つてゐるやうに思つて居たやうであります。私が前に述べたやうな或る種の指示をまで拒むことになる、その領域は案外に狭くなると思ひます。又課題といふ意味を、單に「教師が文題を兒童に與へて書かせる」といふ舊式な見解から解放して、廣く一般に「文を綴らせる」意味にまで押擴げて解釋するとなれば、或は隨意選題の大部が此の中に入るであらうと思はれます。若し、茲に私の見解を許すならば、私は「隨意選題と課題との境界を取り拂つた世界」こそが、最も廣大なる天地であり、眞に自由の境涯であると思ひます。これまで來たら、もはや問題は「領域の廣狹」にあるのではなくて、もつと本質的な、もつと内的な「生活の深さ」にこそ着眼の要點があるべきだと思ふのであります。

隨意選題と課題とを超越して、何物にも囚はれない、しかも兒童の生活に底深く立脚した綴り方の指導、それが私たちの最も望むところであらねばならぬと思ひます。先づ兩者争ふをやめよ、而して其の間の境界を撤せよ、更に親しく手に手をとれ。そして兒童のために高らかに祈りを捧ぐる時、そこに垣々たる綴り方の大道は、一路理想の高嶺へ向つて通ずるであらうと思ふのであります。

### 第三 指導體系を組織せよ

#### 一 綴り方指導體系の必要

アルキメデスの言葉——今日の綴り方は支點を得ざる悩みに陥つて居る——之を救ふ唯一途のみ

私はさきに現今の綴り方教育が一種の悩みに陥つてゐることを述べました。而して其の悩みのタネが、兒童の文章の内面的な行き詰りにあることを述べま



した。今此の悩みを、教師の側に移してみると、それはまさに「手段を持たない」ことの悩みであり、換言すれば「適当な指導體系を有たない」ところの悩みであります。

嘗つて力學の先達アルキメデスは斯う言つて叫びました。——我に支點を與へよ。然らば我よく大地を動かさん。——と。げにや支點さへ與へられたならば、大地はおろか、宇宙萬般、何でも動かし得ないものはないであります。また、望んで得られないものもありますまい。我々人間の目的が達すべくして達せられないのは、悉く適當な支點が得られないからであります。而して綴り方の指導體系は、指導者にとつて唯一の支點であります。現代に於ける綴り方指導者の悩みは、實に此の支點を求めて得られない悩みであると思ひます。

随つて、多くの綴り方教育が已むを得ず其の目くゞの單なる即興的指導に了るか、或はたゞ漫然と兒童に綴らせて放任無指導に終るか、さもなければ在來の課題主義的な教授細目乃至は系統案に準據するか、大方さうした方向に落ち

て行く結果、兒童の綴り方が内面的に少しも深められないといふやうな現状に立ち到つたのではありますまいか。

前にも述べた通り、實際此の頃の兒童の綴り方は、形の上から見ると如何にも器用に整つてゐるけれども、その内面に些かの含蓄もない。しかも、それが尋一、尋二あたりの兒童の文章ならまだしもであります。尋三、尋四……尋六と學年が進んで行つても、其の間に何等内面上の進歩が認められないといふ現状であります。若し強ひて尋三から尋四への進歩の跡を拾ふならば、それは單に言葉遣ひの上で「ありました」といふ敬體が「あつた」といふ常體に變り、「ぼく」といふ假名文字が「僕」といふ漢字に變つたといふ程度のもので、その外には何等の差別を認めることは出来ません。若しそれ、尋六と高一のそれを比較するならば、これはまた意外な方向に發展して、「焼けつくやうな夏日」を「炎熱焼くが如き盛夏」と書き、「學校の門の前を通つた荷車」を「學校の門前を通過した荷車」と書くといつたやうな喜劇を見せつけられることが少



くないのであります。私が前にあげた「遠足」の文例を通讀してみても、その間に學年的進歩の跡の極めて稀薄なことは、容易く首肯さるゝであらうと思ひます。

私が見るところに隨へば、綴り方に於ける形式的方面の仕事の中で、特に文法的語法的といったやうな方面の修練は、論理的記述といふ一面を除いては、尋四ぐらゐまでの間に、もはや其の大部分の指導を終るのではないかと思ひます。といふのは、尋四あたりになると、児童の文章——特に聯想を追うて書くやうな文章は、著しく其の長さを増して來て、いかにもスラ／＼と淀みなく書き綴ることが出来るやうに思ふのであります。で、こゝから後の指導は主として児童の内面生活の方面に向つて、これが發展を促すやうにすることが、極めて大切なことではないかと思ひます。私は今日の綴り方に於て、此の方面の指導が忘れて居るとは申しませんが、しかしながら其の方面に於ける考慮が未だ十分でないといふことだけは、斷言出来ると思ふのであります。而して、

これも其の本を尋ねれば、矢張り「支點」の得られないためでありまして、今日の綴り方教育界に於ける急務中の急務は、指導者各自が本當によりよき「綴り方指導體系」の組織を工夫することにあると思ひます。

## 二 理想の指導體系と之が具備すべき要件

児童の綴り方と其の發展に即するものでありたい——  
児童の個性を害はないものでありたい——鑑賞材料を  
豊富に用意したい——郷土の歳事をつけてほしい。

然らば「理想の指導體系」は如何にして之を組織するか、之が具備すべき要件如何——といったやうな問題は當然そこに生れて來ると思ひます。私は此の間に對しては最も簡明に私の理想を述べたいと思つて居ます。

先づ第一に、理想の指導體系は児童の綴り方生活——物の觀方、感じ方、考へ方、表現の仕方等——の發展に即して指導の方法を工夫し、その指導事項な



り、仕事なりを、學年別に配當したものであつてほしいと思ひます。勿論之が前提としては、兒童の綴り方生活と其の發展に關する考察研究が大いに必要で此の考察研究が、縦にも横にも周到綿密に、且つ正確に果された時、その根柢からのみ理想の指導體系は生れるのであります。

第二には、兒童の綴り方生活に即すべきものであるが故に、それがかりそめにも兒童生活の發展を阻害するものであつてはならぬと思ひます。随つて、兒童生活に——兒童の個性に應じて——適當な刺戟を與へるやうな方法の工夫されてあることは必要であるけれども、兒童を強ひて引張つて行くやうな案は望ましくないと思ふのであります。

第三には右の目的を果すために、必要な鑑賞批評の材料——即ち文例を、豊富に集めたものであつてほしいと思ひます。鑑賞材料の選擇については、いろいろの條件が入用であると思ひますが、就中大切なことは、讀者によい意味の刺戟を與へて眠れる内面生活を呼び覺ますものであらねばなりません。而して

小學校の兒童の生活の深さ、文章に對する修養の程度は、各個人まち／＼でありまして、甲に適する鑑賞材料が必ずしも乙丙に適するとは限りませぬ。故に材料の蒐集に際しましては、その學年に於ける兒童の程度——たとへば優等兒中等兒劣等兒と言つたやうな——に着目する外、各人の個性にも深甚の考慮を拂ふ必要があると思ひます。

第四には郷土の歳事記をつけてほしいと思ひます。子供の生活乃至其の表現が、郷土の山川風物、又は年中行事等と如何に密接な關係を有するかは、私が茲に言ふまでもありません。郷土の歳事記は、子供の綴り方生活にとつて誠に便利な文材の資料寶庫であり、又教師が指導上の参考になることも甚だ多いと思ひます。

以上、私は理想の指導體系が具有すべき條件を思ひつゝいたまゝに擧げてみました。説明が些か抽象に過ぎた嫌ひがありはしないかと思ふのでありますが、この場合やむを得ません。何れ第二篇以下及び別著「綴り方指導體系」に於て



更に詳論もし、具體例もあげたいと思ひますので、茲には簡単に私の意のあるところを述べておくにとどめたいと思ふのであります。

私は序論に於て餘りに饒舌に過ぎました。これからまっしぐらに本論に向つて筆を進めたいと思ひます。

## 本質論

### 第一 綴り方の意義及び目的

#### 一 綴り方の意義

綴ることの意義と其の變遷——綴り方の根柢と綴り方の作用——結論

私は本論に入るに當つて、先づ綴り方の意義を明瞭にしておかねばならないと思ひます。今更再び昔の思ひ出に耽るのは愚かしいことかも知れませんが、實際私たちが小學校時代に於て受けた綴り方の教育——當時の所謂作文教授は型式尊重の一點張りで、内容はまことに空虚なものであります。即ち「作文とは與へられた文題によつて、豫想さるゝ他人の文型を模倣し、他人の美辭麗



句を借用して、點綴を試みることである」と一般に心得、「文は作るものなり」といふ觀念が一般に教師乃至社會人の頭を支配して居りました。所謂「型式主義」乃至「模倣主義」の綴り方がそれで、今日でも中等學校や高等専門學校あたりの作文教師の間には、時にさうした考への所有者が残つてゐるやうであります。これは言ふまでもなく時代後れであります。小學校の綴り方はその後時代と共に進展して、「作文は學校で習つた事柄やお話を自由に書くものである」といふ所謂「自由發表主義」の綴り方觀が生れ、「綴り方と讀方との連絡問題」が高調されるやうになりました。これは前の時代よりは餘程進んだ考へではありましたが、「讀方と綴り方との連絡」が近視眼的に陥り更に内容が兒童の生活を離れてゐた點に於ては、依然として前同様の短所を認めないわけには行きませんでした。ところが時代は更に進んでまゐりまして、「綴り方とは兒童が本當の自分の經驗を書くことである」といふ所謂「自然主義」乃至「寫生主義」的綴り方觀が出現いたしました。茲に於て、綴り方はやつと兒童の生活に根を下ろ

すやうになり、ましたけれども、しかしながら、文章を單なる過去の經驗の記録と見たことや、取材の目標を單なる科學的眞といふことに置いて、道徳的、反逆を敢て辭せなかつたことや、文の創作に科學的組立法を亂用した點などに於て、それは末だ本當に正しい道を踏まへてゐるものとは言へなかつたのであります。其の後、御承知の如く「隨意選題」の綴り方觀が生れ、「文章は兒童の生活の表現」といふことの眞の意義がだん／＼闡明されるやうになつてまゐりました。今日では、そこらの意義がよほど明かになつて、一歩々々正しい道に近づきつゝあるやうでありまして、これはまことに御同慶に堪へないところであります。そこで私は茲にいよいよ「綴り方の意義」を本筋に闡明すべき段取りになりましたが、その前に「綴り方の根柢と綴り方の作用」に就いて一應考へておかねばならないと思ひます。

凡そ如何なる種類の文章（又はうた）でも、之が綴文——創作の根柢となり



基調となるものは、作者自身の生活を描いて他にないと思ひます。即ち、綴る材料（タネ——内容）が生活の中から得られるなら、綴る方法（表現——形式）も亦生活の中から生れなければなりません。同時に綴る作用がまた生活それ自体なのであります。

茲に一言つけ加へておかねばならないと思ふことは、私の所謂「生活」の意味であります。私の茲に言ふ生活とは——これはあとでもつと詳細に述べるつもりであります。それは廣義の精神生活を意味するもので、その中には過去、現在、未來の一切が含まれて居ります。過去の生活は之を経験と申しまして、それは其の人の持つて生れた先天的素質（其の中には父祖の遺傳も含まれて居るものと考へます）と、之を中心に現在の刹那まで營まれて來た過去一切の精神生活であります。未來の生活は之を理想と申しまして、現在の生活をより高い所へ導く力であり羅針盤であります。しかしそれは現在の生活と全く別な道を歩く架空的なものではなく、又現在の生活を離れて餘所に仰がるゝ「出

來上つた完全」でもありません。理想は實に現在の生活に芽ぐんで、しかも其の延長線上に現在の生活の進展すべき方向を指し、之を永遠に導くものであります。故に現在の生活が刻々に進展すれば、理想も亦其の先頭に立つて刻々に進展してゆくのであります。而して、現在の生活はこれ所謂「現實生活」で、これは後ろに過去一切の経験を脊負ひ、前に理想を望んで、刹那々に創造を營んでゆく唯一の實在であります。過去より未來へ、経験より理想への一直線上にあり、しかも兩者の間に介在し、兩者を含むところの更新生活であります。之を要するに、私たちの生活は過去、現在、未來を貫く向上の一路であり、経験と理想を現實に包接して其の一路を辿る生命の歩みであります。綴り方の一切は、その中から生れて來るのであります。

そこで綴り方の根柢を平たく申してみると、先づ

(一) 文の題材（文材——タネ——内容）の方面では、

1. そんなものを觀た経験——感じた経験。



(視、聽、嗅、味、觸——五つの感官を通じて)

2. そんなことを思つた経験——考へた経験。
  3. そんなことを意志した経験——實行した経験。
- が綴る要素として必要であり、また次に

(二) 文の記述 (表現——形式) の方面では、鑑賞と創作の経験即ち

1. そんな文章を読んだ経験——綴つた経験。
2. そんな言葉を聞いた経験——使つた経験。
3. そんな文字を見た経験——使つた経験。

が同様に必要なわけであり、更に

(三) 綴る仕事——作用そのものを考へてみると、

1. 今述べた二方面の経験を要素として、その上に。
2. 直観、想像、思考、靈感、選擇、統一等の精神作用が働き。
3. そこに文を生むといふ創作の仕事が完成される。

と思ふのであります。随つて、文を綴るといふ仕事は、單に作者の過去の経験をそのまゝ記述するといふやうな、そんな單純な作業ではなく、もつと神秘的な、もつと大きな或る種の力が働くところの、極めて複雑な作用——精神生活の営みであることを、私は堅く信じて疑はないのであります。

之を要するに、綴り方とは單なる過去の経験の再現的記録にとゞまる機械的な仕事ではなくて、作者の内に芽ぐむ生命の要求に本づくところの、もつと大きな、もつと複雑な、獨創の営みであります。即ち文は製造すべきものでなく、産み出すべきものです。深く自己の生活を見つめることによつて、その中に新しい自己の姿を——形相を見出し、之を言葉によつて、文字によつて表出したものであります。而して私たちは、さうした仕事を營むことによつて、自分の生活そのものを、より高い所へ、より深い所へ進めるものであると思ひます。私は綴り方の意義をそこに認めたいと思ふのであります。



## 二 綴り方の目的

綴り方の目的——生活の表現——生活の向上深化

綴り方の意義が、自己の生活を見つめることによつて、そこに新しい自己の姿を見出し、之を表出することであり、更にかくすることによつて、自己の生活そのものを、より高い位置に、より深い所に進めるものであるとするならば、綴り方の目的も亦當然そこに方向を求めなければならぬと思ひます。即ち綴り方の目的は、

1. 自己の生活を内省し統一して之を文章の形に表現すること。
2. それによつて眞に自己を知り、更に自己の生活を高め或は深めてゆくこと。

此の二つになると思ふのであります。

しかしながら、かう言へば何だか目的が二途になつて、所謂二兎を追ふの誹

を招ぐかも知れませんが、さう誤解して貰つては困るのであります。右の二つの目的は、決して異なつた方向を指すものでなく、同じく理想より現實への一直線上にあつて、しかもそれが私たちの内部生命の要求に基づく創造活動の進路を指示するものであると思ひます。

今少しく詳言すれば、(2)の目的は人間としての創造生活といふ大きな仕事の目標を指示するもので、(1)の目的はその大きな仕事の過程におかるゝ一ポイントであります。故に綴り方は此のポイントを目的とすると共に、是を果すことによつてそこに一つのサインを試みつゝ、更に次のポイントに向つて努力をよけてゆくのであります。かくて文を綴るそのたび毎に自分の生活を深め、綴つた文章によつて自分の生活活動の跡をたしかめては、そのポイントにサインを了し、それを幾度も、次々に繰返しつゝ、前途遙かなる人生創造の道を歩んでゆく——それが綴り方生活の過程であり、やがて文化人としての生活向上の過程であります。綴り方の仕事は、徹頭徹尾兒童の向上深化しつゝある生活



に即すべきものであり、綴り方の指導が、同様に向上深化しつゝある児童の生活に即して行はれなければならない理由は、即ちこゝにあるのであります。

なほ、生活の向上深化、乃至生活の諸相については、語るべき多くのものがあると思ひますが、それは次章以降に於て、漸次に之を述べることにいたします。

## 第二 綴り方に於ける生活と其の考察

### 一 生活の意義と其の諸相

生活とは何ぞ——外的(物質的)生活と内的(精神的)生活——  
 内的生活の諸相——藝術的、科學的、實踐的、宗教的生活

最近の綴り方に於ける中心問題は、何といつても「生活指導」の四字に盡きてゐるやうな氣がいたします。それは「文章が作者の生活の表現である」とい

ふ見解に立脚する誰しもが當然闡明すべき問題で、近時之が研究に専念する人の多くなつたことは、正しい綴り方の道のために、まことに喜ばしい現象であると思ひます。私は此の問題に就きまして、さきには拙著「生命の綴り方教授」の中に「作者の態度」といふ題下に論じ、更に此の書に於ても「綴り方の意義及び目的」の題下に可成り多辯を費したわけでありますが、尙ほ「指導」といふ立場に於て、もう一度此の問題を綿密に考察してみたいと思ひます。

先づはじめに「生活とは何ぞ」といふ問題を考へてみたいと思ひます。單に生活と言へば、人によつて色々多義に解せられてゐるやうであります。一般的には之を物質的生活と精神的生活の二つに分けて考へられるやうであります。物質的生活は一名之を肉體的生活とも申しまして、通常物を食ふとか仕事をするとか、遊ぶとか寝るとか喧嘩をするとか言つたやうな、主として外面に現はるゝところの生活で、一見他の動物と共通に見える所のあるやうな生活であります。故に之を外的生活とも申します。精神的生活は一名之を靈的生活とも申



しまして、外的な、物質的な、肉體的な生活を統一するところの、内面的な生活で、之を内的生活とも申します。随つて此の物質的外的生活と、精神的内的生活とは、互に相浸潤し、相融合して居り、外的活動の現はるゝ所其處には必ず精神の活動が伴ひ、内的活動の營まるゝ時そこには必ず身體の活動が伴ふといつたやうな具合に、(反射運動のやうな特別な例外はありますが)兩者の關係は實に密接な、而かも有機的な微妙なものであります。而して、そこに實在として人間の意義があり、同時に價值があると思ひます。

わが綴り方は、實に此の内的生活の營みによつて産み出さるゝものであり、精神的生活の所産に外ならないのであります。

今しづかに、此の精神生活の實相を内觀してみまするに、そこには幾多の色彩を異にした精神の働きが、複雑に營まれてゐるやうであります。試みに其の中から最も特色に富んだものを拾つてみると、藝術的生活、科學的生活、實

踐的生活、宗教的生活といつたやうなものが、その重なるものであるかのやうに思はれます。

藝術的生活は感情を主とする生活で、しかも現實、非現實を超越した所謂觀照の世界乃至空想の世界に遊ぶところの生活であり、心と物とが一如の姿となつて共に生きようとする生活である點に於て、大いに特色を認めたいと思ひます。

科學的生活は知を主として營まるゝ生活で、私たちの一般生活の中から或る種の概念を遊離抽出し、更に之を統制してその間に一定不變の眞理法則を發見せんとする生活であります。藝術的生活の世界は、あくまで具象に即し、具體を離れない世界でありましたが、科學的生活の世界は全く具體から離れた概念法則の世界であります。



實踐的生活は一名之を倫理的生活と申しまして、意志を主とし、實行を主とする生活であります。その根柢としては、勿論感情も必要であれば理知も必要であります。しかも感情に馳せて現實を超越し、空想の世界に入ることには之を許しませんし、又知に囚はれて概念法則の梃となることを許しません。此の點——あくまで現實に即してすべてを處理してゆく點に於て、自ら藝術的生活及び科學的生活と異なるところがあると思ひます。實踐的生活は、更に之を道德的生活、經濟的生活、法的生活、社會的生活などと分けて考へてゐる人があります。其の根柢に道德の理法を踏まへ、藝術的生活、科學的生活と不即不離の關係を保つて、ひたすら實踐生活向上の一路を辿るところは、共に同じ基調の上に立脚してゐると見て差支へないと思ふのであります。

宗教的生活はたまひの純化を一すぢに専念するところの生活でありまして、通俗的に考へてゐるやうに、死後の極樂淨土參詣を佛に祈るといふやうな功利

的なものではありません。——このことに就いては、後でもう少し述べたいと思ひますが——随つて、前に述べた藝術的生活、科學的生活、實踐的生活の間にも浸潤してゐるものであります。それよりも更に高次なところは其の特色の存在を認めたいと思ひます。藝術科學道德の極致が宗教の世界に於て合一すると言はれてゐるのは即ちそれでありませぬ。

## 二 生活の深み

外的生活と内的生活との關係——淺い生活と深い生活  
——内觀によつて生活を深めること、その一例——結び

私たちの生活に外面的生活と内面的生活との二面があり、しかもその二つが互に相浸潤し、相融合して、そこに實在として、人間活動を營んでゐることは既に前に述べたところでありませぬ。

こゝらの關係をベルグソンは最も巧みな比喻によつて説明して居ります。ベ



ルグソンに随へば、私たちの生活は恰かも地球のやうなものだといふのであります。地球の表面は空気に觸れて岩石化して居る。ところが、地球の内部にはいつて行くと、岩石化の影響がだん／＼少くなつて、遂に其の中心部にまで達すれば、そこは地球物素とも言ふべき純粹なものになる。而して、私たちは通常地球の内部——特に中心部にある純粹な地球物素を覗き見ることは出来ないけれども、時にどうかすると、火山の噴火爆發といふものがあつて、その純粹な地球物素がラバーとして噴き出されて来る。人間の生活もこれと同じ様なもので、平生目に見えるところの生活は、極めて硬化した、不純なものであるが、内部にはいつて行くに従つて漸次に純化し、その中心部に至つては全く至純なものである。此の至純なものは、いつもは外に現はれないが、時たま其れが火山の爆發のやうに、外部に閃いて出て來ることがある。——といふのであります。

そこで、今度は世間の人たちが、通常淺い生活とか深い生活とか言つてゐるのは、一體何を指して居るのであるか、それが問題になると思ひますが、それはもはや考へるまでもなく、ベルグソンの所謂「岩石化」した、物的な、不純な——或は不純に近い生活、即ち外面的な生活が淺い生活であり、之と反對に内部の地球物素にも比すべき靈的な、純な——或は純に近い生活、即ち内面的な生活が深い生活であると思ひます。

が、しかしながら一方から考へると、かうした抽象的な説明は、もはやこれまで幾多の人々によつて誠み盡されてゐます。それでゐて、「生活の深みとは何ぞ」といふ問題は、未だ十分に解決されて居りません。更に「如何にして生活を深めるか」といつたやうな實際上の問題になると、一層不可解なものになつて居るやうであります。これでは「生活の指導」乃至「生活の深みへの指導」は永久に謎として終るであらうと思はれます。で、私は茲に蛇足ながら、もう少し具體的に物語つておく必要があると思ふのであります。



先づ、私たちが日々營んでゐる生活の中で、觀察——即ち物を観るといふ一面に就いて考へてみませうか。私たちが通常極く無關心な態度で以て物に對する時、そこに現はるゝ具象は、實に感覺的な、表面的な、而して平面的な無意味な客觀の世界であります。山川草木、花鳥風月といったやうな自然界の現象にしる、冠婚葬祭、鬪争遊戯といったやうな人事界の出來事にしる。すべてが單なる客觀的事實として眼に映するに過ぎないのであります。ところが、一旦心を打ち込んで之を観る場合に於ては——（これには私たちの直覺が所謂火山のラバーの如く働きかける場合と、客觀をじいツと見つめることによつて到り得る場合と、此の二つがあると思ひますが、何れにしても）——前に述べたやうなすべての事物が客觀の柵を飛び越えて、驀地に我が主觀——生命の核心に向つて飛び込んでまゐります。私自身の中に自然の具象が飛び込んで來ると同時に、自然の具象の中に私自身が飛び込んで參ります。私自身の心の中に人事界の出來事が生きて來ると同時に、人事界の出來事の中に私の心が生きて行きます。

かうなると、あらゆる客觀がもはや單なる客觀でなくなり、隨つてそこには内面的な、立體的な、而して意味深遠な世界が顯現いたします。かくて主觀と客觀と、心と物との完全なる合致が遂げられ、そこに自他包全の心境、所謂體驗の世界が開けて來るのであります。私たちの精神生活は、かくの如くにして心と物との外面的接觸から、内面的融合の世界へと這入つてゆきます。かくて其の上に、更に思索が加はり、想像が醸されて、深みより深みへと永遠の營みを續けてゆくのであります。

次に、今度は私たちが日々重ねてゆく生活の中で、經驗——即ち或る仕事を、するといふ一面について考へてみませうか。先づ矢張り、極めて無關心な態度で自分の經驗を反省し觀照してみますと、そこに於て頭に浮ぶところのものは、極めて外面的な、表面的な動作であります。一見如何にも機械的な、無意味な動作をやつてゐるやうに見えるのであります。しかし、よく之を内觀してみると、一見如何にも表面的機械的に見ゆる其の動作の奥の方に、その動



作を監督し統一する心の働いてゐることが分ります。例へば、今こゝに私が飯を食つてゐるとします。私の茶碗を持つてゐる手、箸を持つてゐる手は、一見如何にも機械的に上下してゐるやうであります。別に飯を鼻に運ぶでもなく、飯を汁と間違へるでもないところを見ると、私のかうした動作の奥に、私の動作を意識し、監督し、統一するところの心が存在してゐることは、容易に了解出来ると思ひます。ところが、今申したやうなことは、まだく要するに表面的なことで、單に私の飯を食ふといふ動作を「今おれは飯を食つてゐるのだ」と意識する心がその一つ奥にあることをたしかめたに過ぎません。ところが、更にもう少し深く考へてみると、もう一つ其の心の奥の方に、その意識してゐることを意識してゐる心が存在することに気がつきます。即ち表面的な自我の奥に、もう一つ大きな自我といふ物があつて、それが表面的な自我を監督統一してゐます。さうかと思ふと、その自我の奥の方にもう一つ更に大きな自我があつて、前の自我を監督統一してゐます。……かうやつて考へて行くと、私た

ちの自我は果てしなく奥の方へくと深くつゞいて行きます。私たちは自分の生活を内観することによつて、どこまでもそれをたしかめつゞけて行くことが出来るのであります。いくらでも心の奥へ這入つて行くことが出来るのであります。かうして自分の心を見つめて、内へくと心の奥をたづねて行くこと、それが即ち生活を深めることなのであります。之を要するに、生活が浅いといふことは、客観物に對する觀察が、表面的で平面的で無意味であると同時に、自分自身の生活に對する内観が足りないといふことを意味し、結局、物の觀方が皮相的で淺薄だといふことになります。随つて、之と反對に生活が深いといふことは、客観物に對する觀察が内面的で立體的で、深く其の中に意味を見出し、果ては之と同化して主客合致の境涯にまで這入り込むと同時に、自分自身の生活に對する内観が深刻に遂げられて居るといふことを意味し、結局、物の觀方が内面的で深遠だといふことになるのであります。



以上の説明によつて、「生活の深み」の内容は略々明かになつたと思ふのでありますが、私は最後にもう一つ蛇足をつけ加へておきたいと思ひます。それは道徳的方面から如何にして自己の生活を深めるかについて、一例であります。

内観によつて自己の生活を深めるといふことは、生活のあらゆる方面に於て可能であると思ひますが、特に道徳的生活に於ては昔から之が高調されて居る様であります。今その一例について考へてみたいと思ひます。前にも述べた通り、私たちの心といふものは、本來の源をたづねれば、それは善惡を超越した誠に純粹なものであると思はれますが、外部に現はるところの日常行爲を眺めてみると、それはまことに功利的な醜いものであります。即ち道徳的に見て、實に缺點の多い生活を私たちはやつてゐるのであります。例へば、道を歩いてゐる時に拾圓紙幣が一枚足もとに落ちてゐるのを見つけたと假定いたします。此の場合、私たちは先づどうしますか。習慣的に必ず前後左右を見廻すのがお

定りであります。此の金を拾つて私しようとか、しまいとか、さういふ心を起こす前に、必ず先づ前後左右を見廻します。——これは人間が（恐らく如何なる階級の人間でもが）何程づゝか持合せてゐる泥棒根性の現はれであると思ひます——そこで先づ、誰も見てゐるものがなかつたとします。すると無論その紙幣を拾ひ上げて、或はもう一ぺん左右を見廻します。それから次に起るのは、さア此の金をどう處分しようかといふ考へです。途々考へながら歩きます。——「誰も見てゐないのだし、此の儘自分のものにしたつてかまひはしない」——こんな聲がどこか心の中に聞えます。それは言ふまでもなく、醜惡な泥棒根性のあらはれです。所謂惡心です。ところが、まもなく其の背後の奥の方から別な叫びが起ります。——「いけない、いけない、誰れかこつそり見てゐないものもないぞ、もし知れたらどうする」——と叱るやうに叫ぶのは、所謂良心といふやつです。此の良心、名は如何にも良心でありますが、よく考へてみると、まだ功利を脱却してゐない。「もし知れたら」といふ後の結果を打算的に見てゐ



るやうな心持がします。が、とにかく「とつてはいけない」と叫びます。これを通常良心の苛責と申します。良心の苛責に逢つた悪心は、一時或る種の恐怖を感じて青くなります。けれども、また直ぐに元の顔色にかへつて強く抗辯します。——「何、分るもんか。誰も見てゐやしないんだもの」——かう言はれてみると良心も一寸困ります。所謂二元の争ひなんです。ところが、さうした争ひの奥の方には、更に二番目の良心が控へてゐて、此方の経過を見てゐます。眼光鋭く監視してゐます。そして二元の争ひの勝負がつかぬと見るや、今度は自ら出馬して来て、力強い叱咤の聲をかけます。——「おい、何をぐづぐづ言つてゐるんだ。考へて見ろ、その金子は誰かゝ落したんだ。落した人は今頃困つてゐるだらう。自分で落した時の事を考へて見るがよい、氣の毒ぢやないか。早く警察へ持つて行つて届けろ。」——かう言はれて見ると、一番目の良心は一種の羞恥を感じ、顔を紅くして引つ込みます。此の二番目の良心は、一番目の良心に比べて、餘程純に近い、超功利的なものです。此の際所謂悪心は餘程恐怖

を感じます。そこで悪心の方がそのまま退散すればよいのですが、併し仲々性が強い。今度は巧言を以て第二の良心を相手に誘惑に掛ります。——「うむ、なる程お前さんの言ふことに間違ひはない。だがしかし一寸待つてくれ。お五は今金子が欲しいんだ。ね、さうだらう。そら、先月の家賃だつて未だ拂つてないんだし、今此の金があれば大きに助かるんだ。なアおい、落した人にはすまないが、しばらく借りておかうぜ。まアお前さんは目をつぶつて知らぬ顔をしてゐておくれ。」——かう言葉巧みに出られると、第二の良心も亦情に絡まれて一寸迷ひます。所謂煩悶をはじめます。大観すれば矢張り二元の争ひの連続です。……ところが此の争ひのまた奥の方には、更に第三の良心が控へてゐて、此方を監視して居り、今度は物靜かな態度で訓へます。——「お前の心持には同情する。併しそれは人様の金子ぢやないか。自分の入用な金子は自分で働いてとらうぢやないか。不正な金子は鏝一文だつて身につけてはいけない。なア、分つたら早く警察へ持つて行くがよいぞ」——此の力強い正義の叫びに逢ふと、



流石に瘳猛な悪心も遂に甲を脱いで降参し、茲に私たちは猫婆の罪惡から脱れて、その十圓紙幣を警察へ届け、こゝに人間としての正しい道に立ち返つた喜びを味ふのであります。此の三番目に出て來た良心は、二番目のそれよりも更に一層超功利的な純な心であります。かやうにして私たちの心は、外部的生活から内へくと分け入つて行くに従つて、益々功利に遠ざかり、愈々純真に近づいて行くのであります。そして何處までが功利的活動、何處までが純真な活動といふ境界はなく、お互に相浸潤してゐると思ひますが、兎に角終には全く功利を離れた、純真なものになつてしまひます。此の境地が即ち聖であり、大我であり、神性であり、佛教の所謂一向專念であり悟りであります。ベルグソンの所謂「生命の故郷」であると思ひます。そこまで行けば、道德も最早や單なる道德ではなくなつて、所謂宗教の世界に入つてしまふのであります。

右は道德生活の立場から生活を深めてゆく過程の一例を申したのであります

が、前にも述べた通り、生活を深めるといふことは、必ずしも道德の方面だけに止ることではなく、藝術、科學といつたやうな方面からも無論可能なことでもあります。私たちは多くの藝術家の著した藝術的作品を読むことによつて、作者のさうした心境を味ひ、又多くの科學者が發表した研究論文ならびに述作を通して、彼等の觀察乃至思索が如何に深刻に遂げられて居るかを知ることが出來ます。例へば夏目漱石の「吾輩は猫である」の一卷を讀んでも、直ちに前者の體驗は得られませうし、又ダーウキンの「進化論」の一篇を通して後者の實證は得られるのであります。

しかも、藝術道よりするも、科學道よりするも、或は又道德道よりするも、その終局は、何れもが宗教の世界に於て合一の境地に達するのであります。眞善美の極致は聖であるといふ言葉は、即ちそれを指してゐるのであります。而して其の具體的な實例を、私は釋迦及び孔子に見るのであります。

尙ほ、此の生活の深みと綴り方との關係如何、兒童文に現はるゝ生活の深み



如何といふ問題については、次の項及び第四章乃至第五章に於て之を述べさせて頂きたいと思ひます。

### 三 生活と綴り方

生活の深淺と文章の深淺——文章に於ける純眞乃至直覺の閃き——よい文章を得るの道——生活と綴り方との交渉——綴り方科即人生科

今も述べた通り、私たちの生活には内面的な生活と外面的な生活との両面がありまして、外面的な、浅い生活ほど、物の観方が表面的で、皮相的で、平面的で、無意味であり、物の考へ方が物質的で、功利的で、不純で、醜であります。之に反して、内面的に、深い生活ほど、物の観方が内面的に、深刻に、立體的に、有意味になり、物の考へ方が精神的に、超功利的に、純眞に、美になつてゆくのであります。

而して、私たちが、その浅い生活から、表面的な、皮相的な、平面的な、無意味な観方を試み、物質的な、功利的な、不純な、醜い考へ方を試みる時、そこに現はれるもろくの具象は、悉く表面的な、皮相的な、平面的な、無意味な具象であり、そこに覗かれる世界は、悉く物質的な、功利的な、不純な、醜い世界であります。随つて、さうした生活から生れるところの綴り方——文章といふものは、當然薄つぺらな、平面的な、不純な、醜いものであるべきは言ふまでもありません。彼の自然主義的文章の缺點は、まさにそこにあつたのであります。

之に反して、若し私たちが深い生活を営み、そこから深刻な、内面的な觀察を試み、靈的な、超功利的な、純眞な、美しい眼で物を観るとしたならば、そこに現はるゝもろくの具象は、悉く深みある、意味ある具象として眺められ、そこに覗かるゝ世界は、靈的な、超功利的な、純眞な、美しい世界として現するであらうと思はれます。所謂「佛」そのものゝ姿であり、「聖」そのものゝ世



界であらねばならぬと思はれます。随つて、そこから生れた綴り方——文章はこれ亦深みのある、純真な、美しい文章であらねばならぬと思ふのであります。高山樗牛の言つた「文は人なり」といふ言葉は、そこまで考へた時、本當に深い味があるやうに思はれます。

ところが、私たち人間は生れながらにして聖人であることが出来ない以上、自己生活のあらゆる方面を悉く純真な、深みあるものにするには到底出来ないことでもありますし、又自分の生活を純真にまで、深みにまで、或はその境地に近く掘り下げてゆくといふ事も、なか／＼容易なことではありません。彼の大聖釋迦の如き人に於てすら、あゝした悟りの心境を得るまでには、肉體的にも精神的にも幾多の難行苦行を経てゐるといふことであり、又彼の孔子の如きも「四十にして始めて矩を越えざる自由の心境」に達することが出来たと自ら告白して居るくらゐであります。況んや私たちの様な俗人凡夫に於てをやであ

ります。

随つて、私たちの物を観る眼は、ともすれば淺薄になり勝ちであり、不純になり勝ちであり、醜に陥り勝ちであります。たゞ、ベルグソンの言つた「火山の爆發」によつて、時々所謂「純真のラバー」の閃きを見ることがありますが、さうした時には後から振り返つてみて、自分自身が其の純真さ、乃至深さに驚くことがあります。私は前から俳句がすきで、折々句作を試みて居りますが、さうした折りに時たま此の種の體驗を得て、心が躍り立つ程の喜びを感じるがあります。

子供たちの文章に就いて、そこに現はれた彼等の生活を見るに、やはり同様であります。一般的に見ればまだ淺薄な不純な點が少くないやうであります。こゝが、所謂「純真なラバー」の發現も亦時々現はれて來るやうであります。こゝで興味ある問題は、大人の文章と子供の文章とを比べて觀た時、どちらの方に「純真のラバー」が多く現はれて居るかといふことであります。一般的に見



ればそれはどうしても子供の方に多いやうであります。童謡でも綴り方でも、子供——特に幼學年の子供の作ほどが、純真な、直覺的な閃きにみちてゐるやうでありまして、高學年に進むに従つてかうした現はれがだん／＼少くなり、之と反對に不純な、型にはまつた觀方の文章がだん／＼多くなつてゆくやうであります。これは、一つには教師の適當な指導が加へられて行かないのにもよると思ひますが、一面から見れば社會一般の罪でもあるやうに思はれます。即ち、子供——特に幼い子供は、まだ人間社會の不純な醜い空氣に觸れることが少いために、割合に純な生活を送つて居り、又大人のやうに或る種の型にはまつた觀方を強要されることが少いために、割合に澄み切つた直覺的な眼を持つてゐるからであらうと思はれます。之に反して、大人は——或は大人に近い高學年の子供は、功利的な不純な生活上の修練を経たことによつて、ベルグソンの所謂「地球表面の岩石化」が甚だしく、又或る種の型にはまつた觀方に馴らされたことによつて、眼玉の曇りが甚だしく、ために生活内部の純真さ乃至直

覺力が、容易に外部へ出られないからであらうと思はれるのであります。

然らば、私たちは如何にして直覺の鋭さをとり込んだ、深みに徹した文章、乃至は純真な心のあふれた文章を綴り出すことが出来るか、又如何にしたならば、子供の文章をさうした處にまで達せしめることが出来るか、それが残された大きな問題であります。が、しかしながら此の問題は、實は綴り方教育に於ける問題の全部を意味するもので、此の小著の殆んど全體がそれを解決するために費されてゐるわけでありますから、これからぼつ／＼之を明らかにして行きたいと思ふのであります。

たゞしかし、茲で言明しておいて差支へないことは、直覺の鋭さをとり込んだ文章を生むためには、先づ作者自身の生活に直覺の鋭い力が働かねばならず、深みある文章を生むためには、先づ作者自身が深みある生活をしなければならぬ——これと同様に、純真な心のあふれた文章は、作者が純真な心に立ちか



へることによつて、始めて生れるといふことであります。これだけは、何時の世、何處の場所でも適用さるべき普通の眞理であると思ひます。

故に、私たちは子供と共に、さうした生活上の修練——觀察に於ける直覺力の修練、内觀に於ける深みへの修練——を試みることによつて、或は、より深きもの、より鋭きもの、より純眞なるもの、刺戟を得ることによつて、更に或はお互が刺戟を與へ合ふことによつて、めい／＼の生活をより深く掘り下げ、めい／＼の觀察眼をより鋭くし、めい／＼の心をより純眞なものにすることが、一番大切だと思ひます。これがやがて、右の大問題を最も具體的に、しかも各人がそれ自身に解決する所以の道であらうと思ふのであります。

そこで、私はいよ／＼此の項の中心問題である「生活と綴り方との交渉」に向つて、考察の筆を進めなければならぬと思ひます。

前の第一項から第二項に亘つて述べたやうな精神生活は、獨り綴り方人に限つたことでなく、必ずしも文章を綴ることをしない一般の人でも、日々或は時

々之を試みるところの生活であり、又之を試みるものが一般に人間としての價値を高める所以の生活でありました。即ち、當世流の言葉を以てすれば、所謂文化人として最高の價値を發揮する所以の生活であり、同時にそれ自身が生命の發展を意味し創造の過程を意味する生活でありました。

ところで、今茲に文章を綴るといふ仕事——即ち綴文の生活といふものを考へてみると、それは實に、右の一般的な精神生活の過程に於て營まるゝ特殊な創造生活であると思はれます。といふことは即ち、先づ創作慾の發動に基づいて書くべき目標を臚ろげに意識し、次に右の一般的な精神生活の經驗乃至體驗を反省し内觀することによつて、そこに綴るべき題材を發見し、取捨選擇し、把握し、更に之を發展せしめ統合せしめて一篇の文章に綴り上げるといふことが、それが即ち綴文の生活そのものなのであります。さて茲に一篇の文章を書き上げたといふことは、それ自體に於て一つの新しい經驗を構成したわけでありますから、その次に又新らしく文章を綴る場合には、前の綴文生活はそ



のまゝに新らしい文章の題材となり得るわけでありませう。かくの如く綴り方人は、一般的な精神生活を反省し内觀し、之を資本とし基調としてそこに綴文の生活を營んでは一篇の詩又は文章を生み出し、更にその綴文生活を一般生活の中に織り込んで之を其の次に營む綴文生活の資本とし基調としつゝ、之を繰返すやうにして進んでゆくのであります。故に綴り方人にとつては、「一般的、精神生活の過程」即ち「文章創作の過程」と見て、差支へないと思ふのであります。しかも、綴文の生活は、強い反省と深い内觀とを本にして營まるゝ特殊な創造生活でありますから、此の生活を重ねれば重ねるほど、即ち文章を綴る仕事を度重ねれば重ねるほど、その度毎に私たちの生活は深まつてゆく譯でありまして、此の意味から見ても文章を綴るといふ仕事は人生にとつて大事な仕事であり、文化人に缺くべからざる要件の一つであると思ひます。綴り方といふ學科が、文章を綴るといふこと其の事に目標をおくと共に、文章を綴ることによつて益々自分の生活を深化向上せしめるといふ人生の最高目的に目標を置く

所以は、まさに其處にあるのでありまして、今日世間で叫ばれてゐるところの「綴り方科、即ち人生科」といふ言葉も、蓋しそこに第一義を認むべきであらうと思はれます。又、綴り方の指導が、兒童各自の生活、特に文章創作の過程に即して行はるべきものであるといふのも、全くそこに理由があると思ふのであります。

尙ほ、綴文の生活と相對して考へらるゝ讀書の生活——即ち文章を讀み味ふ生活、創作に對する鑑賞——は、これ亦一般的な精神生活の中に織り込んで考へてよいと思ふのであります。私たちは之を營むことによつて、人生の深さと其の方向とを暗示され、同時に生命發展の上に或る種の偉大なる刺戟と聲援とを興へらるゝ點に於て、極めて大切な生活の一面であると思ひます。特に綴り方人にとつては、文章創作の上から見て、間接的に有力なる暗示と刺戟とを興へらるゝ生活でありまして、或る一二の天才者を除いては、其の必要は全く絶對的と申してよからうかと思ふのであります。



最後にもう一つ考へておきたいことは、綴り方の根柢乃至背景ともいふべき方面、及びそれと「綴り方科、即人生科」といふ言葉との關係に就いてであります。これは既に今まで述べて來た間にも、たび／＼觸れたところの問題であると思ひますが、こゝでもう一度總括的に申述べておきたいと思ふのであります。

最近私の學校を訪れた或る人が、私に向つて「此の頃の綴り方は修身教授と密接な關係を持つて居る様に思ひますが………」といふ話をされました。自分の生活を掘り下げて行くといふことから言へば、すべてが同一の境涯に達するのは、前にも述べた通り當然の歸結でありまして、道徳的に深い生活から生れた文章が、其の深さと正しさを、力強く讀者の心に分け與へることは自明の理であると思ひます。私はさうした意味で、其の人の言葉を非常に面白く感じたのであります。

これは敢て修身科に限つたことでなく、あらゆる學科、否、學校の教科ばかりでなく、凡そ人間の生活にあらはるゝすべての方面が、皆、綴り方と密接な關係のもとにおかれてあると思ふのであります。即ち、綴り方の根柢乃至背景は、藝術、科學、道徳、宗教、その他あらゆる人間生活の全面にふれて居り、生活の最深部に浸潤して居るのであります。最近、綴り方が單なる國語の一分科から解放されて、「綴り方科、即人生科」と叫ばれるやうになつたことには、かうした理由もたしかに其の一面をなして居ると思ふのであります。

そこで、最近の流行語である「綴り方科、即人生科」といふ言葉に就いて考察してみると、そこには次のやうな二つの意義内容を含んで居るやうに思はれます。其の第一は、綴り方は人間の生活を深める上から見て、大切な仕事であるといふ意味であり、其の第二は、綴り方の根柢乃至背景は人間生活の全面にふれて居るといふ意味であります。而して其の何れもが、右の言葉を裏書きするに大切な條件をなすものであると思ふのであります。



随つて「綴り方科、即人生科」といふ言葉は、綴り方科が本来當然受け持つべき責任、乃至は教育といふ大きな立場から負擔すべき責任を、修身其の他綴り方以外の教科に轉嫁したり、或は教科以外の一般生活に分擔せしめたりなどして、自らの責任を逃れようといふ卑怯な、横着な態度に利用すべきものではないと思ひます。若し斯くの如きことが許されるならば、それは實に綴り方科の自滅を意味することになると思ふのであります。然るに、今日の綴り方指導者の中にあつて、一方では「綴り方科、即人生科」を唱へながら、他の一方では、「綴り方科の目的は主として兒童の綴文能力を養ふにある。書いてある内容は悪くとも、文章が巧ければそれはよいとしなければならぬ。」など、言つてゐる人もあるやうに聞き及んで居ります。これはまことに慨かましいことの限りであると思ひます。尙ほ此の件については、第四章に於て、更に具體例を以て所見を述べることとし、こゝには唯伏線を設けておくにとどめて、此の項を結びたいと思ふのであります。

### 第三 綴り方生活の内面的考察

#### 一 綴り方に於ける創作

創作の意義——創作の作用——創作と模倣——創作と所謂型の模倣

茲に綴り方生活といふのは、前章に於て述べた通り、一般的な精神生活に於て營まるゝ特殊な生活で、換言すれば「文章を創作するところの生活」であります。綴り方のあらゆる指導が此の生活を中心として、之に即して行はれることは今更言ふまでもありません。此の意味に於て、私はこゝに文章創作の生活の内面的考察を試みたいと思ふのであります。

先づ創作の意義について考へてみたいと思ひます。創作といふことを一般的に定義すれば、それは生活の改善乃至進化といふことになるかと思ひます。随



つて綴り方に於ける創作は、文章表現による生活の改善乃至進化を意味するものであります。即ち綴り方に於ける創作は、先づ創作慾の發動に本づいて書くべき目標——題材の中心點を意識し、次に之に本づいて生活の反省を試み、そこに題材の取捨選擇、乃至題材の統一構成を行ひ、更に之を言葉に現はし文字に托して所謂内容の形式化を試みるところの作業であります。その際に於ける私たちの意識は形式を得てはじめて發展するものでありまして、換言すれば表現することによつて始めて私たちの生活はそこに改善進化を遂げるのであります。私がさきに、綴り方の目的を、生活の表現、及び之による生活の向上深化においたのは全く此の理に基づくのであります。

さて、創作といふ一つの作業が行はれるに就いて、其の運動の中心をなすものは何であるかといへば、それは申すまでもなく私たちの内部生命即ち個性を中心とするところの自我その物であります。創作運動を起す動機は、或は外部からの刺戟慾憑によることもありませうし、或は内的の發作に本づくことも

ありませうが、何れにしても其れが内部的生命の要求にならなければ、創作の活動は運轉を起さないと思ふのであります。即ち、文章を創作するといふことは、私たちの内部生命の要求に本づく一つの生活活動であつて、之を營むことによつて私たちの生活は益々深められ、益々向上するのであります。而して其の間に於ける私たちの精神作用は、前に「綴り方の意義及び目的」の第一項に述べた如く、極めて複雑なものであります。それに就いては尙ほ本章の第二項以下に於て、之が説明を盡したいと思ふのであります。

茲に一應考慮の中に入れておきたいのは、創作と模倣との區別であります。理想主義の哲學に従へば、創作と模倣との間には嚴然たる區別があつて、或る一部の天才者を除いては創作は出來ないものゝやうであります。これは結局理論に捉はれた見解であると思ひます。理論の上から推してゆくと、さうした事が言へるかも知りませんが、事實に於てはその理論を裏書きする様な人は極



く少いのでありまして、恐らくは創作と模倣とを厳密に區別して實行の出来る人は絶無であらうとすら思はれます。即ち、全く既往に於ける他人の或る種の創作乃至環境の現象に影響を受くることなく、ヒントを得ることなくして生み出された創作は、未だ嘗て殆んど存在しないといつてもよいのでありまして、又將來と雖も恐らくさうであらうと思ふのであります。で此の點に就いては、私は寧ろベルグソンの創造的進化論により深い興味を感じ、共鳴を覺ゆるのであります。ベルグソンに従へば、私たちの内部生命の積極的順應が即ち創作であるといふのであります。——私たちの人格は、次第に蓄積して來たとするの経験によつて、刹那々に新らしく造られ、間斷なく變化する。さうだ、變化するが故に、如何なる状態も皮相的に見れば、前の状態と似てゐるやうに見えるかも知れないが、決して眞底から同じ物ではない。即ち私たちは嚴密な意味に於て、過去の経験をそのまま反覆することは不可能なんだ。何となればさうした反覆を可能ならしめるためには、前の経験から後に起つた一切の記憶を消

し去る必要があるからである。記憶を消し去るなんといふことは、理論的に考へることは出来ても、到底實行の上では出来ない相談である。斯くの如くにして、私たちの人格は不斷に芽さし、生長し、成熟してゆく。其の各々の瞬間は前の瞬間に増加された何物かである。……一步を進めて言へば、單に新らしい何物かであると共に、實は豫測すべからざる何物かである。……意識を有する生物、即ち私たち人間に於ては、存在するといふことは即ち變化するといふことである。變化するといふことは即ち成熟することであり、進化することである。進化するといふことは即ち不斷にそれ自ら創造しつゝ進むことである。——と彼れはかう言つて居ります。してみれば、私たちは平生「模倣」といつてゐるのも、實は「創作」の一部分でありまして、私たちは純粹の模倣をすることは出来ない……と同時に純粹の創作も出来ない……イヤ、私たちの精神活動は全部之を創作と見て差支へない、と斯ういふ結論に立ち到る譯であります。私が前創作の一般的定義を生活の改善進化と申したのは即ちそれでありませう。



綴り方に於ける創作と模倣との関係も矢張り同様でありまして、特に文章といふものが「言葉」とか「文字」とかいつた様な一種の形式的制約の下に生み出される関係上、兩者の間に明確な境界の線を引くことは恐らく不可能であらうと思はれます。で私たちは、出来上つた文章を其の現はれから判断して、「これは模倣的色彩が強い」とか、「これは獨創味が多分にある」とかいつべき場合に、言葉を簡單にして「これは模倣だ」とか「これは創作だ」とか評價するに過ぎないと思ふのであります。

ところで、實際指導の上から茲に注意すべき一つの問題は、子供をして意識的な型の模倣に陥らせぬやうにすることであり、換言すれば「此の文章は組立てがうまい。いゝ言葉が使つてある。よし、一つ此の文の組み立てを真似てやらう。言葉を拜借してやらう」といつたやうな、不純な心を抱かせぬやうにすることであり、そのためには、教師が讀本の文章などを取扱ふ際に、綴り方との連絡を近視眼的に功利的速効的に考へる態度を先づ改めなければい

けません。讀本の文の組織の研究を直ちに綴り方に移したり、或は讀本の語句を綴り方に使へば名文が出来ると途方もないことを言つたりする時、多く此の種の誤解を生じ、悲しむべき結果を生むことになるのであります。

昔はよく「模倣より創作へ」と言つて、模倣は創作の階梯として是非必要な過程であるとされ、それが極めて機械的に適用されて居りました。しかし、今日に於ては最早やさうした行き方を推賞する人はありません。意識的に他人の文型を學ぶといふことは、生活表現の上から見て、極めて價值の少い事に屬すると思ふのであります。

## 二 綴り方に於ける創作の過程

創作の準備期と創作の完成期——準備期に於ける生活の營み——完成期に於ける生活の營み

次は、綴り方生活の過程について、同じく内面的な考察を試みたいと思ひま



す。私たちの生活が文章として生み出さるゝまでの過程といふものは、前にも述べた通り極めて複雑な、且つ神祕的な精神生活の営みでありまして、みだりに分節乃至解剖を許さない性質のものであると思ひますが、今私が敢て之を試みたいと思ふ所以のものは、實に之によつて兒童の綴り方を指導する手がかりを得んが爲めに外ならないのであります。

で、私はさきに拙著「生命の綴り方教授」の中にも之を試みたのでありましたが、その後いく度びか反省の結果、説明の意に満たぬところがありましたから、茲に修正を試みて、説明を新たにしたいと思ふのであります。

私は第二章の第三項——「生活と綴り方」——に於て、私たちの一般的な精神生活の過程が、綴り方人に於てはそのまゝ文章創作の過程を意味するといふことを申しました。今さうした見地に立つて文章創作の過程を眺めて見ますると、そこには二つの時期を劃することが出来るやうに思はれます。その一は「創作の準備期」でありまして、其の二は「創作の完成期」であります。而して「創

作の完成期」は一文一詩を生み出すことによつて其の終りを告げ、同時に前の準備期の内容中に織り込まれて、更に次の創作の資本となり準備期となることは、これ亦前章の第三項に於て説明した通りであります。

以下、此の二つの時期について、順次に之が説明を試みたいと思ひます。

創作に於ける準備期といふのは、愈々文章を書かうといふ創作的の氣分にみち／＼と、さうした綴文の活動をはじめめるまでの過程でありまして、所謂一般的な精神生活の全部が悉く之に入るわけでありまして、しかも綴り方人——即ち文章を創作する人にとつては、その生活内部に文のタネをやどし、或は創作慾の發動を促す素因をつくるどころの大切な時期であります。これはすべての文章創作がさうであります。特に藝術的な作品の創作におきましては、此の時期に於て十分に其の根柢が培はれ、素材が集められ、更に思想の練熟感情の純化といつたやうな仕事が遺憾なく遂げらるゝことによつて、はじめて眞の



傑作が生れるのでありまして、然らざる場合に於ては、往々にして「藝術の胎」乃至亂作、駄作の誹りを免れないことになるのであります。

故に、慎重を以て自ら任ずる偉大なる作家程、此の時期の長びくのが常でありまして、傍の俗人から見れば何もせず唯遊んでゐるやうに見え、もうよい加減に書いたらよささうなものだと思はれますが、當人にとつては實にやるせない、苦しい、たよりなさを感じる生活であります。人知れぬなやみの生活であります。其の昔、泉州堺の一國寺に寄食してゐた一繪師が、三年の間筆もとらで遊び暮したといふのは、實は唯呑氣に面白く遊んでゐたのではなく、其の間には此の人知れぬやるせなさを味ひつゝ、徐ろに時期の到来を待つてゐたのであります。天來の興の湧き来るのを、今か／＼と待つてゐたのであります。多くの作家、文章家が、「氣が向かねば筆がとれない」といふ心持はまさにそれでありまして、作家、文章家にとつては、實に「生れ出づるなやみ」以上のなやみであります。兒童が綴り方を書く場合でも、矢張り此の過程を通るもので

あることを考慮の中に入れておかなければならぬと思ひます。

さて、此の「創作の準備期」に於ける私たちの精神生活の内面を考へてみると、そこには次のやうな三つの階段があるやうに思はれます。

- 1、受納
- 2、反芻
- 3、内制作

1、受納といふのは私たちが内在的に有つてゐる官能——感官の動きによつて内外の刺戟を受け納れることで、所謂感覺乃至知覺の世界がそれでありまして、すべての精神生活は、それを出發點として、それ／＼の方向へ發展してゆくものであると思ひます。

2、反芻といふのは、牛や羊のそれから思ひついた言葉であります。それは感官の働きによつて受け入れた刺戟、印象を本にして、そこに生活の反省内観を營み、以て受納の生活をしみ／＼と味ひ、或は之を理想化することを意味



するものであります。所謂想像乃至思惟の作用によつて營まるゝ生活がそれであり、而して想像の生活は感情を中心として營まるゝところから、それはやがて藝術的表現の根元をなすものであり、思惟の生活は理知を主として營まるゝところから、それは自ら論理的表現の本源をなすものであります。前者を藝術的觀照と呼び、後者を科學的直觀乃至論理的思考と呼んでゐる人もあるやうであります。彼の所謂藝術的、情的、文章は遠く源を前者に發し、所謂論理的、知的文章は遠く源を後者に發してゐると思ふのであります。

3、内制作といふのは一種の構成作用乃至統合作用でありまして、文章の内容が形式化さるゝ直前の姿であります。私たちは、日常生活に於て、たびたび此の種の生活を營んだ經驗を有つて居ります。即ち、この印象を斯うまとめたら面白い歌が出来るだらうとか、あの事件を斯ういふ風にまとめて物にしたら面白い小説が書けるだらうなどと思つてみるのがそれでありまして、而して、若しそこに異常な創作的興奮でも併發するならば、それは直ちに表現への過程と

なつて、私たちの精神活動はこゝに「創作の完成期」に入るのであります。

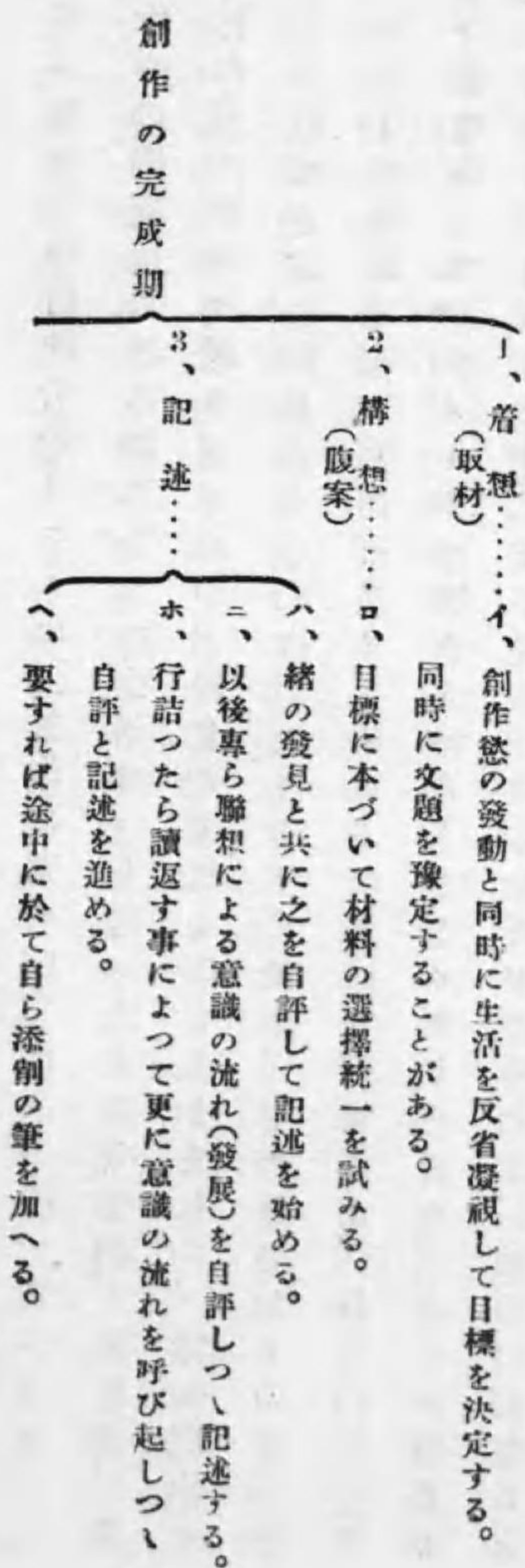
創作の準備期に於ける綴り方人の生活は、今述べた處の(1)受納、(2)反芻、(3)内制作の三つが再々繰り返されつゝ營まれて居るのであります。特に創作に熱心なものほど其の回数が多いわけでありまして、就中、更に熱心なものは、平生ポケットの中にノートをひそませ、折にふれて此の内制作を、假りの外制作、即ち下書きとして其のノートに書きとめる人も少くありません。多くの歌人や俳人が即ちそれでありまして、又小説家や文章家などの中には、旅中の印象などを簡単な言葉で、要項としてちよい／＼ノットに書きとめておく人も少くないやうであります。これはやがて創作の素材となり資料となるべき性質のものであります。子供にもかうした試みをやらせることは、頗る有効なそして面白いことであると思ひます。

創作に於ける完成期といふのは、いよいよ創作慾が發動してから、文章を生

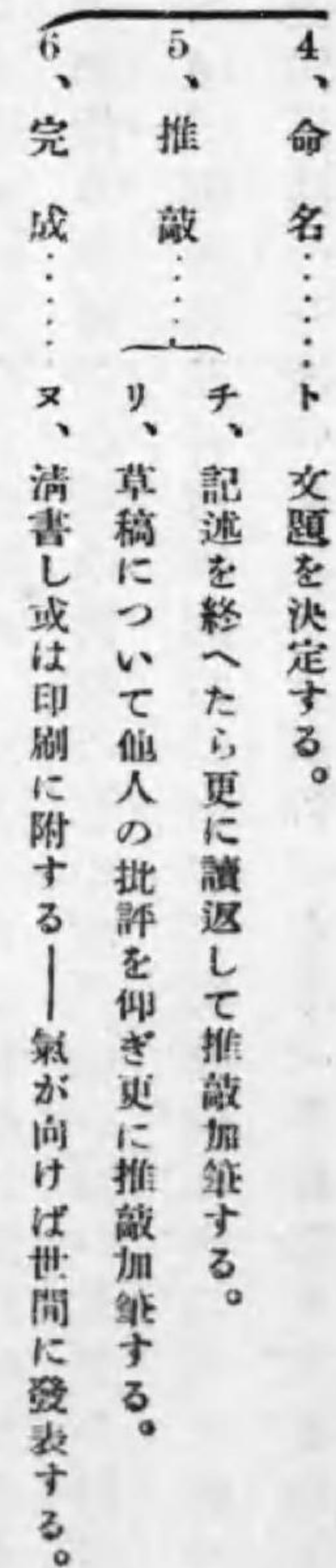


み出すまでの過程でありまして、綴り方に於ける、所謂「綴る時間」の仕事がそれに當るのであります。藝術家の所謂「生みの苦しみ」乃至「生れ出づるなやみ」は、とりもなほさず此の過程の心境を物語るものであると思ひます。

さて、此の完成期に於ける私たちの精神生活は、如何やうな順序に營まれてゆくかといふに、それは更に次のやうな階段に分けて考へることが出来ると思ふのであります。



1、着想(又は取材)といふのは、いよく綴らうといふ氣分を起してから、書くべき事柄の目標を頭の中に意識することでありませぬ。此の過程に於て最も大切なことは、過去の生活経験を内觀し省察し疑視するといふことであると思ひます。すべて文章といふものは、現在の出來事なり實感なりを、直ちに其の場で書き綴ることの出來るものではありません。一旦之をやり過して経験となし、後からしみじみと省察し觀照することによつてのみ、之を如實に書き現はすことが出来るのであります。即ち文章の記述はすべて回顧的なものであります。これは、多少でも文章を書いた経験のある人には、直ちに納得の出來ることだと思ひます。





而して、此の場合そこに營まるゝ精神生活の作用を考へてみるに、先づ最初綴らうといふ氣分を起すこと、それは私たちの内部生命から發したところの創作本能そのものゝ衝動であり要求であると思ひます。即ち一種の情意作用であると思ひます。然るに、此の衝動的な要求が現はれて來ると同時に、私たちの頭には一種の創作活動が開始され、目標の意識と共に之を中心とする材料の選擇統一が行はれて、書くべき内容乃至輪廓がおぼろげにきまります。かうなると最早や、私たちの創作活動は、次の

2、構想（又は腹案）の過程に入つたのであります。此の過程に於ける精神活動は一種の想像作用（前の過程から根をもつて居ります）乃至思惟作用でありまして、前者からは藝術的な作品が生れ、後者からは科學的論理的な文章が生れることは、前に創作の準備期の中の反芻のところでも申したのと全く同様であります。（後の第六項、表現活動と論理的規範参照）藝術的な作品は大體に於て意識の感情的な發展に待つものでありますから、書くべき緒即ち書き出しの

一句を得ることによつて直ちに次の記述に入るのが普通であります。然るに論理的な文章になると、それは主として意識の知的な論理的な發展に待つものがありますから、最初の書き出しの一句を得る以前に於て、大體の豫想に基づく一篇のプランを立てることが頗る便利であります。中には、此のプランを記録にとどめて文旨の一貫をはかる人もあります。書くべき要項の個條書きが即ちそれでありませう。此の點については、更に第六項に於て詳細に述べたいと思ひます）かくして腹案がまとまれば、次の記述の過程に入るのであります。

3、記述は言ふまでもなく表現であります。内容の形式化であります。そのはじめ、書くべき内容と輪廓とが臚ろげにきまると、今度は書くべき緒を探しまして、之がうまく見つかれば記述の仕事は割合に樂にスラ／＼と運んで行きます。時には一瀉千里の勢で、たちまち記述を終へることすらあります。しかも、それは實に多くの場合、書き出しの第一句が適當であるか否かによつてきまるものであります。文章を評價する人が——特に入學試験の場合等



に於て——「文の書き出しと、文の結びを見れば、大體その文の價值を判定することが出来る」といふのは、その意味に於てたしかに眞實であると思ひます。

さて、いよく記述がはじまると、私たちは専ら聯想の發展に従つて意識の流れを筆端から文字に移して行きます。それが殆んど神が、りの如き状態に於て次から次へスラ／＼と展開してゆくのは、誠に氣持のよいものであります。こゝで一番大切なことは、記述のはじめに立てた目標を、時々意識に上せてふりかへりつゝ、聯想の糸を手繰つてゆくことでもあります。若し、聯想の奔放に任せて目標を全く忘れることになる、文は時々途方もない方面へ脱線してしまひます。尤も藝術的な作品に於ては此の脱線が却つて面白い結果になることがあります。論理的な文章になると、それがために文の破綻を來し、思想の矛盾に陥ることが少くありません。此の意味に於て、綴り方は記述の途中に於て時々反省と自評を試み、適當に添削を試みる必要があります。

記述の作業が些かの淀みもなく、一瀉千里の勢で進んで行つたならば、直ち

に次の推敲の過程に入つてよいのでありますが、しかしそんなことは餘程の靈感でもない限り稀でありまして、多くは二三行若しくは四五行の後にパツタリと意識の流れが停鈍するものであります。元來、私たちの文章創作に於ける意識の流れは、適當な形式、即ち適當なことばと文字とを得ることによつて始めて發展するもので、これが得られない時には、一時已むを得ず意識の流れは中止するのであります。此の際、私たちは甚だしく心の焦燥を感じます。こゝが綴り方人の所謂生みの苦しみの大なる一つであります。此の場合、最も役立つものは、平素の讀文生活によつて得た豊富なる語彙、及び文字力、乃至數多き綴文乃至創作の經驗であります。文章の上手下手は大體こゝでもきまるのであります。

時には文の一段落が終つたところで、パツタリと筆の動かなくなることがあります。それは思想乃至詩藻の貧弱な人に於て、特に多いのでありますが、此の際一番有効な手段は、一節前から、更に或は最初から讀みかへすことによつ



て、いつとはなく自ら其の文中に入り、そこから更に思想の泉が滾々として湧き出て來ることがあります。世に所謂「創作の中にも鑑賞あり」といふのは即ち此の心境を物語つたものであらうと思ひます。即ち私たちは自分の生命躍進の流れを内聽することによつて、更に之が活動を促されてゆくのであります。こゝらの心境も亦、文章を書いた経験のある人には、容易くうなづかれる所であらうと思ふのであります。

4、命名といふのは文題を決定することでありませぬ。従來の綴り方に従へば文題は文を綴る前から決定して居るものの様に解せられ、甚だしきは文題を見つけて來るなどと言はれて、文題と文材との概念の混淆が平氣で行はれて居ましたが、文題といふのはさうした性質のものではあるまいと思ひます。文の着想に於て選ばれた題材に、名前を豫定することはあつてもいゝと思ひますが、それはどこまでも豫定であつて、決定ではありません。論理的に發展せしむべき文章の文題は、豫定が餘程確實性を帯びて居るのは事實であります。藝術

的發展をなすべき文章の文題は、豫定すら出來ない場合が少くありません。彼の夏目漱石の「吾輩は猫である」の文章の題目の如きも、第一篇を書きあげて雑誌にのせる際にはじめて決定したのださうであります。故に文題の決定は、一篇の文章の記述が終つたところで、よくその文章を讀返した上、内容と相談して文の生命の中心を捉へ、而して之を快定すべきであると思ひます。

5、推敲といふのは自己の記述に自己自らが批評を試み訂正を試みることであります。(推敲の語源は後に「綴り方に於ける推敲の指導」の題下に於て説明いたします。)故に、推敲といふことは實は記述と同時に、或は之より前から始まるものであつて、記述の途中に於ては度び／＼之が繰返さるべきものであると思ひます。私が前の記述の過程に於て、「自評」「推敲」の語を所々に用ひたのはその意味であります。

推敲は今も述べた通り、記述の途中に於ても無論必要であります。一篇の記述が一通り終つた後に於て、更めて全體的に之が推敲を試みることは、これ



亦極めて大切なことであると思ひます。而して大體から言へば、綴り方に於ては此の自己批評乃至自己訂正といふことによつて、自己の満足が得られたら、それで創作は完成の域に達したと見てよいのでせうが、しかしながら創作の経験の浅いもの、乃至自己の貧弱なものは、之を其の道の先覺者乃至は同學者に見て貰つて、之が批評を仰ぐといふことが、たしかに賢い修養法の一つであらうと思ひます。又一方から言へば此の様にして自分の作品を同學者間に於てお互ひに見せあひ、批評鑑賞しあふといふことが、同時に讀文の生活を有効に營む所以にもなるので、これ亦文章道修養の上から見て、たしかに有効な方法の一つであらうと思ふのであります。

6、完成といふのは所謂仕上げであります。學校の綴り方で言へば、先づ文題の決定もその一つ。次に清書したり、或はそれで一冊の本にまとめたりするのがそれでありませう。印刷に附して製本するのも矢張りそれでありませう。さうした場合には、作者は矢張り文字の大きさや、その排列法や、もつと神経質な

人になると紙の色とか紙質とかいつたやうな方面にまで周到な心を配るものであります。かくて自己玩賞を目的とする場合にはそのまゝ机上に保有さるるわけでありませうが、氣が向けば之を世間に發表するわけでありませう。

しかしながら、實際から言へば、此の(4)完成の過程に於ける前述のやうな仕事の多くは、他人に手傳つて貰ふのが普通で、特に小學校の綴り方に於ては、(3)推敲の過程を終へれば、それで以て完成とは言へずとも一と先づ仕事を打ち切りにする場合が非常に多いのであります。

以上、文章創作に於ける一般過程の内面的考察を一通り終へたつもりであります。これからは、此の綴文生活に於ける主なる要因乃至精神作用に就いて更に考察を試み、以て綴文生活の内面的考察を一層充實したものになりたいと思ふのであります。



### 三 創作と観察想像思惟

観察と感受性——観察と直覺——観察と反省——想像と思惟

一般に文章を綴る上に於て、何よりも大切な要因の一つは観察といふことであらうと思ひます。観察のたしかなところ、そこに私たちの生活のたしかさがあり、観察の深刻なところ、そこから深刻な文章が生れます。その意味に於て観察は文章の母であるといつてもいゝと思ひます。

さて私たちが物を観察するに當つて、先づ其の先驅をなすものは、私たちの官能の働きであり、而して其の働きの本體は私たちが内在的に持つて居るところの感受性そのものであります。物に對する驚異、嘆美、没入等の精神生活は、すべて此の感受性を中心に營まるゝものであり、かくして私たちは心と物との接觸、燃焼、融合を遂げ、茲に私たちの認識、體驗といつたやうな價值ある内面生活が開かれてゆくのであります。誰やらが「感じ得る者は幸福なり」とい

つたのは、此の意味に於てたしかに至言であると思ひます。

彼の藝術家が五官（視・聽・味・嗅・觸——五つの感官）の解放とその修練とを高調する所以はまさに茲にあり、科學者がまた等しく之を認める所以も意味あることとであります。げにや驚きは物を知るのはじめであり、やがて愛するのをはじめであります。古池に飛び込む蛙の音に、おどろきの耳をすます時、そこから芭蕉の俳境は開け、林檎の落下におどろきの目を見張る時、そこにニウトンの萬有引力は發見されたのであります。すべての藝術・科學・道徳・宗教は皆こゝから出發し、發展してゆくのであります。感受性の健全なる鋭敏さ、それはあらゆる創作にとつて、何より大切な要素であると思ひます。

感受性と結合して渾一的に働く睿智のか、私たちは之を直覺と申します。直覺の働きも亦観察にとつては極めて必要な要素でありまして、物の特徴を掴むとか、具體の特殊化、單純化を行ふなどいふ創作上の大事な仕事は、此の直



覺の鋭さを有つ人にして、はじめて可能なことであります。彼の文學上に於ける自然主義時代の所謂平面描寫から、今日の象徴描寫への推移の如き、まさに是れ直覺、尊重の歴史を物語るものでなくて何でありませう。

世に所謂簡潔な文章、餘韻ある文章、含蓄ある文章といふものがあるならば、それはまさしく直覺の働いた文章であり、又之と反對に、たら／＼と締りのない文章、冗漫な文章、平凡な文章といふものがあるならば、それはまさしく直覺の働きの乏しい、或は之が絶無な文章をさしたものであらうと思はれます。

觀察に於ける感受性、及び之と渾一して働く叡智の力即ち直覺は、共に文章創作にとつて極めて大切な要素であります。さうした觀察を最も有効に文章にまで發展せしめるためには、生活の反省といふことが、又何よりも大切なことになつて参ります。或る人も言つてゐる如く、私たちは「實感を燃焼點に於て捉へることは不可能」でありまして、「後からいみ／＼」と思ひかへしてみる」

ことによつて、はじめて之を捉へることが出来るのであります。私が先きに綴り方は回顧的なものだと言つたのは即ちそれでありませう。觀察はかくの如くにしてたしかさを加へ、文章はかくの如くにして深みを加へるのであります。而して、此の際主として働くものは、想像及び思惟の作用であることは、前に創作の過程を説くに際して、前後二回に亘つて之を述べたことでありました。即ち創作の準備期に於ける反芻、及び完成期に於ける着想（取材・構想（腹案））に於て營まるゝ精神作用は實にそれなのであります。

特に想像の作用に至つては、子供の綴り方生活に於て最も重要な地位を占めるもので、綴りの上手下手は大部分之に負ふところが少くないのであります。想像は通常之を二つに分けて考へられます。その一つは再生的想像又は追經驗などと言はれるもので、之は主に記憶の力によるものであります。他の一は之を構成的想像或は創作想像と稱せらるゝもので、之は經驗の上に出發はしても、



経験の再現ではなく、現實を超越し時間と空間とを超越して、果てしもなく翼を擴げるものであります。「想像は創造なり」等と言つて居るのは、言ふまでもなく後者を指すのであります。此の二種の想像によつて私たちの精神生活は無限に擴げられ、私たちの文章は無窮の廣さと濶さを有つて來るのであります。思惟は一種の知的想像ともいふべきもので、そこにも亦無限の廣がりがあり、無限の深さがあります。所謂「思索」はかくの如くにして營まれ、理知的に深みある文章はかくして生れるのであります。

#### 四 創作と三昧境

創作と三昧境——三昧境に入るの道——三昧境と環境の整理

創作の完成期に於ける第一歩、即ち着想乃至構想の過程に於て、私たちの常に體驗することは、一種の内面的な苦しみであります。即ち、私たちは内に心

を集めて、ひたすらに何物かを掴まうとあせるのであります。しかも私たちの心の中は、混沌とした或る物で一杯になつてゐて、掴まうとする對象は、恰かも泥中の鰻の如く、する／＼と逃げまはります。眼前に或る種の形が出て來たかと思ふと、忽然として消え失せてしまひます。時に私たちをおびやかす様に、異様の色彩が現はれたり、音響が聞えたりして、頭が／＼と鳴ることがあります。時には又、たしかに掴まへたと思つたものが、まるで途方もないまやかし物であつたりすることも少くありません。私たちはそんな時、たまらない程の苦しさを、やるせなさ、いら／＼しさを感じます。かうした切ない心持は、次の過程、即ち書くべき緒が見えられまで續くのであります。

かうした苦しみの過程に於て、私たちのとるべき手段はたゞ一つしかありません。即ち感官を外に閉じて、心眼を内に開くことであり、私たちは通常之を凝想、静思と申しますが、それがだん／＼と長く持續して遂に無我に入る時、それは通常三昧境といふ言葉で呼ばれてゐます。三昧境は文の記述の過程にも



及んで、私たちは殆んど神がりの状態になつてしまふことすらあります。所謂記述に油がのつたといふのはそれであり、創作はそこまで行つて、はじめて傑作神品を生むことになるのであります。

三昧は今述べたごとく、すべて物事に熱中して無我の心境に入ることです。まずから、獨り文章のみならず、あらゆる藝道に用ひられます。俳、三昧、碁、三昧、茶、三昧など皆それであり、彼の懐中時計を卵と間違へて煮たフランクリンの如きも、たしかに此の三昧境に入つてゐたのであります。してみれば、三昧境こそは、あらゆる創作の母體であると申してもよからうと思ふのであります。

三昧の境に入るとは前述の通り創作上極めて大切なことでありますが、そこに入る過程は人により場合によつて必ずしも一様ではありません。強い意志によつて擬想を試みる人もあれば、酒を飲み煙草を喫んで精神の興奮に待つ人も

あります。中には又天井の節穴を見つめる人もあるかと思へば、顎髯を一本づつ抜いては机上に並べる人もあると言つたやうな譯で、これ等は多く其の人の習慣によるやうであります。時にはまた同じ人でも、庭を散歩したり、或は何かひよつとした調子でかうした心境に入ることがあります。所謂インスピレイションの降下といふのはかうした時の心境を言ふのでありませう。

併し、兒童たちの綴り方は、近來即席即題で書かされる場合は極めて稀で、多くは數日前、又は數時間前に豫告されるのでありますから、其の間に書くべきタネをさがしておき、反芻と内制作とを幾度びも繰りかへして、所謂創作の準備をして來るものが多く、教場に入つて綴りの時間に臨むや、直ちに三昧境にはいつて、記述を一瀉千里の勢で進めてゆくものが少くありません。ただ極く少數の者のみが、所謂「題がない」ことの悲哀を味ふといつたやうな事になるかと思ひます。



三昧の境に入るの過程は人により場所によつて異なること今述べた通りであります。茲に注意すべき一つの事實は、之が外的條件、即ち環境についてあまりす。

三昧の心境は前に述べた通り無我の心境そのものでありますから、之を妨げるやうな外的條件は、之を適當に整理しなければ、到底茲に入ることとは出来ません。例へば激しい燥音、強い光線、けばくしい色彩等、すべて強烈なる外的な刺戟は、三昧境にとつて大の禁物であります。随つて、學校に於ける綴り方の時間などは、此の點に深甚の注意を拂ふことが必要だと思ひます。即ち隣の教室から下手なオルガンの音が響いて來たり、運動場から綱引きの銅鑼聲が硝子戸をふるはすやうに押し寄せたりする様なことのないためには、時間割の編製にも相當の考慮が必要でありませうし、又強烈な光線や色彩を防ぐためには教室内の設備にも意を用ひる必要があると思ひます。

然らば、三昧の境に最も適した環境如何といふに、それは今言つたやうな強

烈な外的刺戟の一切を除いた環境がそれではなりません。古人は牀上廁上車上の三上をあげて理想の三昧境と申しましたが、之はなかなかよい見立てであると思ひます。

先づ光線の上から見て、三上は實に理想的であります。有明行燈の影ほの暗き床の上、北向きで廂の低い廁の上、幌や簾をかけた牛車の上、何れも三昧に相應はしい境地であります。

次に音響の上から見ても矢張さうであります。深夜人の寝しづまつた後の床の上、表通りから遠ざかつて車や馬の音の聞えぬ廁の上、物しづかにゆるゆると行く牛車の上、共に理想の三昧境であります。

かの泰西の作家マーテルリンクの如きも、此の點については非常に意を用ひ、自分の書齋にある窓のカーテンは悉く青味を帯びたグリーンのものを選んだといふことであります。蓋し青や緑は極く落ちついた色で、思索にふける人にとつては最もふさはしい色であるからであらうと思ひます。又彼の哲人カントの



如きは、環境の静寂を求めるために度々其の居をかへたと言はれてゐます。かうした點については、今日の日本の小學校あたりでは餘りにも無關心に過ぎるやうな氣がいたします。

近來、「綴り方は學校で書かせるのをよして、家庭で書かせるがよい」と主張する人の多くなつて來たことは、其の心持に於てたしかに賛意を表すべきものがあります。しかしながら、學校の教育は矢張り一個の集團教育であるところに特色を有つものであり、又教師及び學校當局者の工夫如何によつては、十分創作に適した環境を造り得るものであると思ひますから、綴る仕事を全然家庭作用に廻すまでのことはあるまいと思ひます。

尙ほ、子供が文を綴つてゐる間、無用な机間巡視などしないで、教師も子供と共に綴つて生みの苦しみを體驗し、且つ文章道の修養を試みることは、子供のためにも、教師自身のためにも、まことに仕合せなことだと思ふのであります。

## 五 創作と靈感

創作の神秘性乃至偶然性——創作と靈感——靈感と努力

創作に於ける精神作用は、前にも度々述べた通り極めて複雑な、且つ神秘的なものでありますから、昔からよく創作の神秘性乃至偶然性といふことが言はれてゐます。「文は造るべきものではない、生むべきものである。」といふ言葉も矢張り同じ内面を物語つてゐるものであると思ひます。

彼の寫生主義的綴り方が、主知的な科學的製造法によつてのみ文章を造り出ささうとした時代から考へて見ると、今日の綴り方指導者の考へ方は、殆んど隔世の感じがするほどに進んで居ります。僅か十年そこ／＼の間に、綴り方を或る一定の時間に教室内で一齊に綴らせるのはどうか、といつたやうな問題が論ぜられるやうになつたほど、それほどに創作の神秘性が重く認められて來たことは、綴り方教育にとつてまことに喜ばしい事であると思ひます。



創作の神秘性を最も意味深く説明するために、通常「靈感（インスピレーション）」といふ言葉が用ひられます。靈感に打たれたと言へば、それは人間以上の或る不思議な力を感じたといふことであり、靈感が降下したと言へば、同じく人間以上の或る不思議な力が自分に乗り移つたといふことを意味します。だから或る人は之を神來とも呼び、天來とも呼びます。宗教上に於ける神佛の顯現といふ言葉も結局は同じ心持を言つたものであると思ひます。

綴り方生活の上から靈感を考へてみると、先づ書かうといふ氣分を起すこと、そのことが天來の興によつて誘發されたと思へられることがあります。次に、三昧の境に入つて殆んど神がりの状態になること、それがまた靈感の降下を直感せしめることもあります。また日常の内面生活に於て、物におどろくこと或は物の特徴を直覺的に掴まへること、そこにも亦靈感と共通な或る不思議を感じさせることがあります。即ち靈感は、私たちの生活の隨所に於て、隨時に之

が顯現を感じるのでありますが、茲に注意すべき一つの事實は、その何れの場合でも、之を前以て豫定することの出来ない點であります。「靈感はすべて不用意の時に到る。」これは蓋し千古の名言であると思ひます。

私たちの大小の創作——凡そ創作と稱せらるゝ範圍のものには、必ず靈感が伴ふと思ひますが、その大小は必ずしも一定して居りません。特に藝術的な方面では、重要視されるべきものゝやうに思はれます。藝術家が想を構へるために、いゝタネをつかむために、無爲三年を送るといふ一見徒然の生活も、内面に立ち入つて見ると、その間にはちいつと靈感の降下を待つといふ心持があるのではないかと思はれます。

かう言へば、靈感は全く神の恵みによるもので、人間の力では之を如何ともすべからざるものと考へられます。若し事實さうであるとすれば、靈感はまさに勸業債券の當り籤の如く、運の悪い者、恵まれざるものには、たとへ頭の働



きがよくても降つて来ず、従つて立派な創作は出来ないことになる勘定であります。實はさうでなくて、やはり其の人の天賦及び努力に待つところが多いやうであります。特に天賦に待つところの多いことは、偉大なる作家が天の恵みを受けた幸運者とは呼ばれずして、天才者の名を以て呼ばれて居る事實が何よりの證據であると思ひます。かうしてみると、靈感は外來的なものではなくて、むしろ内在的な一種の力であると考へられます。哲學者が、叡智又は悟性を以て之が本體と見てゐるのも全く茲にあると思ひます。

靈感はかくの如く、其の人の持つて生れた天分に待つところが頗る多いと思はれますが、一方また努力によつて天分を幾分か補ひ得るものであるとも言はれて居ります。ノールソンの如きは靈感を心理學的に研究して其の六法則をあげて居りますが、その最後の法則に「自分で考へよ、靈感はそこに自ら到るであらう。」と述べて居るのは、明かに此の努力が靈感を呼ぶ有力な方法の一つであることを説いたものであると思ひます。特に面白いのは、米國の發明王エヂ

ソンの言葉で、彼は嘗つて或る人に向つてかう言ひました。——すべての發明は、九分のパイスピレイション（汗）と、一分のインスピレイション（靈感）と合體したところから生れるものだ。——と。パイスピレイションは言ふまでもなく努力であります。今此の言葉を通じてエヂソンの意中を忖度してみると、彼は當代の天才者として何人も許してゐる人でありますから、多分は其の相手に對する謙遜と獎勵の意味もあつたでせうが、尙ほ一面から考へれば、彼は單なる天才者として世人に推されることをあきたらなく思つてゐたとも考へられます。それですべての發明は努力に待つところが多しと言つたのだらうと思はれます。だが併し、流石のエヂソンでも、パイスピレイションを全部とせず、最後に一分のインスピレイションを残しておいたところに無限の意味があるやうに思はれます。即ち努力を重ねて九分通りまで出来上つた時、そこに残る一つのインスピレイションが働いて創作が完成される。換言すれば、努力によつて靈感を呼ぶことが出来る。——といふ意味で言つたとも考へられないことは



ありません。スマイルスが「天は自ら助くるものを助く。」と言つたのも、同じやうな意味に聞こえて、私たち凡俗にはうれしい言葉であると思ひます

## 六 表現活動に於ける論理的規範

表現活動の關門——科學的生活の表現と論理的規範  
——藝術的生活の表現と論理的規範——倫理的宗教  
的生活の表現と論理的規範——約結

綴り方生活に於て思惟乃至想像の對象として取扱はれるところの材料は、やがて之は文章の内容となるべきものでありますが、その實體は言ふまでもなく作者自身の精神生活そのものであります。而して、其の精神生活の實相を眺めてみると、そこには藝術的科學的倫理的宗教的といったやうな諸相があることは、前章に於て述べた通りであります。

ところが、是等色相を異にしてゐるところの諸生活が、一度び綴文の生活に

於ける表現活動の關門を通過する段になると、そこには所謂「論理的思考の規範」の働く場合と、然らざる場合とがあります。前者からは論理的説明的の文章が生れ、後者からは藝術的描寫的の作品が生れます。

科學的生活は本來が論理的思考の生活でありますから、之が綴文生活を通過して表現さるゝ場合には、當然、より多く此の論理的規範が働かざるを得ません。即ち、私たちは例令簡単な一小論文を草する場合に於ても、それが科學的のものである限りは、前後に矛盾のないやうに、立言に不備のないやうに、之が注意を怠つてはならないと思ひます。随つて、綴文生活に於ては、先づはじめにプランを立て、論理的規範に本づく材料の選擇排列を行ひ、次にいよいよ記述にかゝつてからも、時々此の規範を意識に上せて論理の破綻に陥らないやうにしなければならぬと思ひます。所謂「論理的な文章」はかくして生れるのであります。



しかしながら、いかに科學的の生活の表現といへども、綴文生活そのものは一つの生きた生命活動でありますから、徒らに論理的規範の奴隸となり了つて、徹頭徹尾之に拘束されたのでは、生れ出た文章が生き／＼とした生命の自由さを保つことは出来ません。一見形の整つた文章は出来ても、萬人に其の深さと正しさを分け與へる様な文章は生れません。死んだ干からびた文は出来ても、生きた濕ひのある文は生れないのであります。

こゝに於てか、私たちはもつと自由な立場にかへつて、具體的な藝術的な色彩をもとり入れ、生命躍動のあるがま／＼(ありのまゝ)ではありません)なる姿をそこに顯現しようといはします。所謂「説明のうまみ」や「熱ある力ある論文」はさうしたところから生れると思ひます。

藝術的生活は元來が具體に即して營まれ、自己(主觀)と對象(客觀)との人格的交融を意味する體驗の生活でありますから、そこには何等論理的思考の

規範を必要といたしません。否、さうした規範を働かすことは、むしろ此の種の生活にとつて甚だ有害であります。随つて之が生活を表現しようとする綴文生活に於ても、何等此の規範の適用を必要としないのであります。即ち、私たちが一篇の詩を草する場合に於ては、先づ生活の凝視によつて描くべき對象(具體)の特徴を掴み、それを體驗そのまゝの發展に随つて形式化するのであります。かくの如くにして、具體の特殊化、單純化が遂げられ、同時に生命躍動のあるがま／＼なる姿がそこに生き／＼と描き出されるのであります。藝術は、ここに於てはじめて「生命象徴」の本義を全くすることが出来ると思ひます。

しかしながら、然らば私たちが藝術の創作をなす場合には、絶體に論理的思考が加はらないかといふに、それは必ずしもさうではありません。前にも述べた通り、綴文の生活は複雑にして神秘的な精神作用の營みで、言はゞ私たちの精神作用が渾一的に全一的に働くところの生活でありますから、その内面に無意識不用意に論理的規範の働くことはやむを得ないところであるのみならず、



一向差支へないことであると思ひます。随つて、多くの藝術、特に高級な藝術品の中には、深みのある豊醇な藝術的内容と同時に、之が表現の論理的整齊の美を感じさせられるものが少くありません。けれども、それは決して作者が論理的規範に専念することによつて生れたものではなく、作者の頭腦の明哲さが自然にそこに現はれたのであると見なければなりません。即ち、その作者が藝術的生活の深みと共に、科學的生活の深みを併せ得て居ると見た方が至當であると思ふのであります。私がさきに、高級な藝術的作品に於て、特にそれが多いと言つたのは、その意味に於てあります。

若し私たちが、藝術的生活内容を表現するに當つて、はじめにプランを立てたり、或は記述に際して論理的規範を専念したりすることになつたら、私たちの生命は勢ひ之に拘束されて本來の自由さを奪はれ、随つてそこには形式ばかりが整つた、内容の貧弱な或は空虚な作品が生れるであります。所謂「こしらへた文章」「虚飾に陥つた文章」は其の尤なるもので、それほどまでに墮落し

なくとも、「或るテーマが先きに目につく作品」や「型に囚はれた文章」になつて、それだけ内容の貧弱さ、力無さを見透かされることになります。舊式な和歌や月並の俳句は之が何よりの證據であると思ふのであります。

かうした意味に於て、私は現代の綴り方に一つの不滿な點を發見致します。それは「プランの立て方」乃至「目次をつくること」といつたやうなことの指導についてあります。前に述べたやうな科學的生活の記述、即ち論文説明文の記述に於ては、腹案に際して「プラン」を立てたり、「目次」をつくつたりすることが相當必要でありませうけれども、藝術的生活の表現に際しては、さしたる必要なのみならず、むしろ有害な場合の非常に多いことを思ふ者であります。よく遠足の記事を書かせるのに最初目次を書かせるやうな指導をやつてゐるのを見受けますが、それは單に遠足の報告を完全にさせる目的であるならば、いざ知らず、さもない以上は子供の聯想による自由な體驗の發展に任せておくことこそが、最も至當なやり方だと思ひます。元來遠足の記事の如きは一種



の印象記であるところに特色を認むべきものでありますから、此の意味に於て一種の藝術的表現でなければならぬと思ひます。更にその印象は時間的に連続してゐる點に於て、子供の聯想は最も容易であります。随つて、餘程長途の、或は數日に亘る旅行の紀行でもない限りは、之が記述に當つて、前以てプランを立て、目次を記す必要はないと思ふのであります。若しそれ、遠足の記事を以て、論理的記述の練習教材たらしめると言ふならば、それは遂に型式主義の再來にあらざるかを疑はざるを得ないと思ひます。

之を要するに、藝術的生活の表現に當つては、論理的規範の働く場合と、働かない場合とがあります。之が働く場合と雖もそれは意識的に働くのではなくて潜在的に働くのであります。此の意味に於て、藝術的生活の表現は超論理的、非論理的ではありません。であると思ふのであります。

倫理的、生活乃至宗教的生活は、本來が實行生活の反省によつて、善乃至聖へ

の道を一すぢに専念するところの生活であります。之が文章として表現されるに當つては、大抵の場合論理的規範の働くのが普通であります。例へば自分の意見なり、主張なりを述べる場合とか、或る行爲や思想を批判する場合には、當然此の規範が無意識的にも、亦意識的にも働くのであります。故に綴文に於ては、科學的生活と同様に、先づはじめに此の規範に基づいてプランを立て、更に記述にかゝつてからも時々此の規範を意識に上せて論理の破綻を未然に防ぎ、或は反省によつて破綻の彌縫修正を施しつゝ進んでゆくのであります。

しかしながら、こゝでも亦前に科學的生活の表現のところて述べた様に、徹頭徹尾論理的規範に拘束されて、大事な生命の力を殺ぎ、情熱を滅却してしまふことは大いに戒むべきことで、そこには大いに藝術的色彩をとり込む必要があると思ひます。而してそれは科學的生活の表現に比して、更により以上のさうした必要を痛感するのであります。

尙ほ、寓話、譬喩といったやうな種類の作品を生むに當つては、特に論理的



規範がなるべく表面に露はれぬやうに努力する一方、藝術的表現の心持をより多くとり込む必要があると思ふのであります。

そこで、右に述べたやうな綴り方生活に於ける表現活動の關門を中心にして、私たちの生活と之を内容とする文章との關係——即ち文の内容から形式への關係を、發展的に眺めてみると次のやうな圖表が出来ると思ひます。



文章を大別して、知的文章と情的文章の二つとするも、みな右の理由に基づくのであります。

### 第四 兒童の綴り方生活と其の發展

#### 一 取材の方面より見たる兒童生活の發展

はしがき——藝術的生活と其の發展——科學的生活と  
 其の發展——倫理的生活と其の發展——宗教的生活と  
 其の發展

綴り方に於ける指導が兒童の綴り方生活を當面の目標とするならば、之が指導の方法は言ふまでもなく兒童の綴り方生活の發展に即して行はるべきものでなければなりません。此の意味に於て、兒童の綴り方生活と其の發展を考察することは、綴り方指導者として極めて大切なことであると思ひます。

兒童の綴り方生活は、之を種々の方面から試みることが出来ると思ひますが、私は指導の實際上の便宜から、先づ取材の方面から之が考察を試みたいと思ふのであります。



而して取材の方面から兒童の生活を考察するにつきましたも、又種々の分類法があると思ひますが、私は就中その基本的なものとして次にあげる四つの方面から考察してみたいと思ひます。即ち、

- 1 藝術的生活
- 2 科學的生活
- 3 倫理的生活
- 4 宗教的生活

がそれでありませう。何となれば、それは綴り方に於けるあらゆる素材が、此の四つの生活に於て立派に統一され、そこに眞の意味の題材、即ち精神内容となるからであります。

さて、今度は實際に兒童の生活に直面して、右に述べた各方面の生活が如何様な順序に現はれ、又如何様な發展の経過をとるものであるかを考察してみると、そこには尋常一年から高等二年に至る八箇年の間に、凡そ四期の發生的變

化を見ることが出来ると思ひます。即ち、

- 第一期 尋常科第一二學年
- 第二期 尋常科第三四學年
- 第三期 尋常科第五六學年
- 第四期 高等科第一二學年

といったやうな見當であります。

次に各方面から之が考察を試みたいと思ひます。

前にあげた四方面の生活の中で、先づ第一に現はれるのは藝術的生活であります。或る哲人が「兒童は生れながらにして藝術家である」と言つた如く、彼等は學校生活に入る以前、幼少の折りからして既に多分に此の種の色彩に富んだ生活を管んで居ります。

第一期に於ける彼等の生活は、第一次藝術の時代とも言ふべきものでありま



すが、其の色彩は頗る濃厚で、本能的な生活を除く残りの殆んど八九分通りは此の種の生活であります。先づ物の観方から言へば、その対象が悉く具體具象であると言ふまでもなく、心の動きは多くが主観的であり主情的であります。特にあらゆる具象に人格を移入して之を友達扱ひにし、「鳩來い鳩來い鳩ぼつぽ、一緒にいごととして遊ぼう」だの、「だるま〜雪だるま、寒くはないか雪だるま」だのと親しく呼びかけるやうな、所謂擬人的な観方は、此の時代の子供に最も濃厚な色彩であります。又、物の観方が直覺的で、よく物の特徴を掴まへるなども、特色の一つとして數へたいと思ひます。所謂童謡は、さうしたところから生れる、最も純な心のひびきであります。

第二期になると、第二次藝術の時代にはいりまして、そこには今までの主観的な、主情的な物の観方の中から、漸次に客観的な、主知的な物の観方が芽ぐんで参ります。随つて、物の観方が著しく緻密になり、擬人的な観方の如きも一步進んで「私は兎であります」といつたやうな、所謂「擬人體」の文章に於

て知的な觀察の緻密さが驚くほど加はつてまゐります。綴り方に寫生乃至描寫の色彩が著しく出て来るのは、之がためであります。

第三期になると、第三次藝術の時代に入りまして、一旦主知的、客観的、色彩に富んでゐた物の観方の中から、再び主情的、主観的な観方が發生してまゐります。所謂内省的、内観的、傾向が現はれて来るのであります。それは一見、第一期の生活の再來の如くに見えるかも知れませんが、決してさうではなく、第一期から第二期の洗禮を経て新たに創造された生活であります。こゝに於て、兒童の藝術的生活はいよ〜豊熟の期に入り、綴り方の上では自己觀照の態度も現はれて来るのであります。

第四期は第四次藝術の時代で、之は大人の自然主義的色彩に近づいたものと見ることが出来ます。即ち、物の観方が再び客観的、主知的色彩を帯びるやうになります。しかし、これは勿論第二期の生活の再現ではなく、やはり第三期の生活の發展進化したものであります。随つて綴り方の上では、印象主義以後の



文學に見るやうな描寫のうまみが、濃厚に現はれて來るのであります。

科學的、生活の發生は、藝術的生活の發生に比べて、凡そ一期だけ後れるやうに思はれます。即ち、

第一期の時代は、前科學の時代ともいふべき時期で、所謂科學的な觀方や論理的な考へ方は、まだ一般的には現はれて來ないのが普通であります。たゞ或る一部の頭のいい子に（或は早熟の子かも知れません）於て、之が發露を見るのであります。

第二期に入つて、漸く第一次の科學時代が出現いたします。これは藝術的色彩の濃厚な彼等の生活の内部から發展して來るものであると思ひますが、彼等は此の時期になつて、そろ／＼科學的な觀方や論理的な考へ方をするやうになり、讀み方の學習に於ても、文章の要領乃至大意の把握がだん／＼確實性を帯びて來るのであります。隨つて綴り方に於ても、説明的な態度が現はれて來る

し、プランを立てるとか、まとめるとかいつたやうな態度が出て來るのであります。たゞし第一次の時代であるが故に、文章に知的破綻の多いことは、むしろやむを得ない事實であります。

第三期になると、第二次の科學時代に入ります。この時期になると、兒童の科學的生活は餘程進んで來て、概念の構成とか論理的思考の統一とか、更に或は法則の發見といつたやうな方面にまで進んでまゐります。隨つて綴り方の上にも其の種の色彩が著しく現はれ、所謂説明の文章や、乃至は自分の意見、主張をのべて論ずるやうな文章が生れて來るのであります。

第四期になると第三次科學の時代で、兒童の科學的生活はいよ／＼大人のそれに一步步近づいてまゐります。即ち思想も内面的に深まつて來るところから、綴り方に於ても、相當深みのある意見を述べるものが出て來るのであります。

しかし全體から見て、特に藝術的生活と比較する時、未だ一期の遜色あるこ



とは争はれない事實でありますから、随つて綴り方の上でも、科學的論理的な文章に於ては、大人から見えて一種の物足りなさを感ずることは、如何ともなし難き事實で、これこそ功を他日に待つべきものであらうと思ひます。

倫理的、生活の目ざめは、科學的生活のそれに比して、更に一期の遜色があると思ひます。即ち、

第一期は之を前々倫理時代とも申すべく、彼等の生活には、倫理的、道徳的な考へ方はあまり濃厚ではありません。特に第一期は、現實と空想の混淆時代とも言ふべく、童話と事實とが一緒になつて居る時代でありますから、所謂責任感だの、生活の道徳的反省だのは、甚だ少いと見てよからうと思ひます。尤も藝術的な觀方の中に、道徳的な觀方の萌芽はもつて居るのでありますして、花咲爺の童話の中に勸善懲惡といったやうな單純な道徳觀念は見出すことが出来るのであります。随つて綴り方の上でも、此の種の生活の現はれは、たゞ情的な

藝術的な表現の中に、之が萌芽を見出だすのみであります。例へば親に對する謝恩といふ感じの如きも、自分が病氣になつた時や、お母さんが病氣になつたといったやうな場合を書いた文章に、之が發露することはありますが、抽象概念的な「親の恩」などといったやうな題材を取扱ふことは不可能と見てよいと思ふのであります。

第二期は前倫理時代ともいふべき時代で、まだこゝでも第一期のそれと大した變りはありません。たゞし此の時代の後半期からは、さうした生活の現はれがぼつ／＼出て来るやうであります。

第三期は第一次の倫理時代で、倫理的、道徳的な觀方考へ方が一般に芽を出してまゐります。随つて文章の上にも、内省、批判、乃至かうした方面に於ける意見の開陳が現はれて來るのであります。

第四期は第二次倫理の時代で、前期よりも一層深く此の種の生活へはいつてゆくやうであります。随つて文章の上にも此の種の論述がだん／＼増して來る



のであります。

しかし、これ亦科學的生活のその如く、否それよりも更に一期ほどの後進でありますから、大人の考へてゐるやうな此の種の深みは、到底望み得ないのであります。

宗教的生活は、小學校生活に於ては之を求めるのが無理であるかも知れません。唯或る特殊な者のみが、しかも第四期の頃に至つて漸くさうした色彩を現はすやうであります。たゞし宗教心の根元である驚きとか恐れとか、或は超功利的な純情、乃至内省的な物の觀方は、倫理的生活と共に藝術的生活の裡に胚胎されてゐて、藝術的表現に於てまゝ之が發露を見るやうであります。

## 二 表現活動の方面より見たる

### 兒童生活の發展

はしがき——第一期に於ける兒童の表現活動——第二期に於ける兒童の表現活動——第三期に於ける表現活動——第四期に於ける兒童の表現活動——結び

兒童のあらゆる方面の生活が、綴文生活に於ける表現の關門を通過するに當つて、論理的規範の働く場合と然らざる場合とがあり、而して後者からは藝術的作品が生れ、前者からは論理的記述の文章が生れることは、既に前に述べたところでありました。今度は兒童生活をさうした方面から考察してみたいと思ひます。つまり、兒童の綴文生活に於ける表現の關門が、如何様な働きをなし、又それが學年的に如何様な變化を齎らすかを考察したのであります。而して之が考察に當つては、矢張り前同様、兒童の綴り方生活を四期に分け



て考へることが最も便利だと思ひますから、さういふことにいたしたいと思ひます。

第一期、即ち尋常一二年に於ける綴り方生活は、私の所謂第一次藝術の時代で、科學的、論理的な生活は未だ前位に屬し、一般的には之が現はれを見ることが出来ないといふことは、前に述べた通りであります。而して、綴り方生活に於ける表現活動は、前述の基礎的な生活に即して之と發展を共にするものであるところから、此の時期に於ては主として藝術的表現活動が行はれ、論理的表現活動は一般に現はれてまゐりませぬ。即ち精神内容が表現の關門を通過するに當つては、論理的規範が殆んど働かないのであります。それは此の時代の綴り方の特色ともいふべき次のやうな色彩を數へ得ることによつて、明瞭に納得の出来ることであると思ひます。即ち、

1 「僕が……」「僕のうちには……」「僕は……」といったやうな、自分の生活を

そのまま主觀的態度で記述したものが多いこと。

2、「僕はよろこびました……」「僕はうれいでした……」「僕はボチが大好きです……」といったやうな、自分の心持を率直單純に述べた文が非常に多いこと。

3、「ボチよこい／＼パンやるぞ……」「田圃の中の案山子さん、あなたは何を見てゐるの……」「私の靴は一年の時から……よくお伴をして行きました……」といったやうな具合に、生物無生物を悉く一樣に擬人化して、親しい友達のやうに扱つてゐるものが多いこと。

4、「僕のお父さんはめがねさんです……」「ぼくの兄さんはたばこ蟲です……」といったやうな、奇想天外的な象徴的な言ひ方をよくすること。

5、表現記述は、殆んど全く聯想を追うて次から／＼無反省に發展したものが多く、隨つて知的、論理的、乃至文法語法的な破綻が非常に多いこと。等は、何れも此の時代の綴り方の特色として之をあげることが出来ると思ひま



す。

而して、右の中、(1)(2)(3)は言ふまでもなく藝術的表現活動の濃厚なる現はれであります。 (3)の一例としては次のやうなのもあります。

私のくつ

私のくつは、一年の時から、學校へ行くにも、餘所へ行くにも、よくお伴をして行きました。あんまり働きすぎたので、おなかの皮が破れて、だるさうになりました。もう此の上働かせるのは、かはいさうでしたから、病院に入院させて、おなかの破れをなほして貰ひました。そして、すつかりもとの様に元氣になりました。又もう一度働くと言ひますから、今度は私より小さな、かあいとお嬢さんのお家來にしてやりました。大そうかあいがつて下さいますから、きつと私の時のやうによく働んでせう。(尋二女)  
全く主情的な暖かい心持の現はれであります。而して同時にお伽の國へでも遊んだやうな心持がいたします。

(4)の現はれには言葉の貧弱、未熟といふことも幾分手傳つてゐると思ひますが、しかし大人の象徴描寫と相通する直覺的な頭の働きを否定することは出来ません。

(5)に至つては、即ち論理的規範の未だ働かないことを意味するものであります。その主なる實例をあげると、次のやうなものがあります。

(兒童の文章にあらはるゝ表現上の缺點又は病氣)(その一)

イ、助詞の用法の誤り

□ 私のうちには、お父さんや、お母さんも、姉さんがゐます

□ 僕のお父さんの頭は禿があります。

ロ、言葉の重複したもの

□ 私のかばんは、つくゑの下に、かばんはおいてあります。

□ 私は昨日お母さんと、活動(寫眞)を見に、お母さんと行きました。

ハ、言葉の連發



□それから学校へ行きました。それからおけいこをしました。それから歸つてお使ひに行きました。

□ぼくが学校から歸りよつたら、牛が追つかけて来たから、逃げたら、やつぱり追つかけて来たから、又どんく逃げよつたら、そこへよそのをぢさんがきて、牛をつかまへてあちらへ連れて行きました。

二、主客の混淆

□わたくしはお父さんにかばんを買つて下さいました。

□僕はお父さんに毎日字や繪を見せて下さいます。

ホ、叙述の混乱に陥つたもの

□私が山へ遊びに行くと、きれいな花がたくさん、ついでに花や藤の花がその外の花もさいてゐました。

□私のうちには犬とにはとりと、三毛猫はをばさんのうちから貰つて来たのです。

へ、説明語の不適當なもの

□私のうちは兎と菊の花であります。

□机の中に鉛筆と本がゐます。

□私は顔を洗つて、空が曇つてゐました。

ト、時間的記述と空間的記述との混淆

□私のお父さんは仕舞がすきで、今でも毎日講の本を読みながら、前へ進んだり、後へ下つたりしていらつしやいました。

□私のお母さんはたばこがすきです。それで毎日ひまさへあれば、きつと長いきせるにつめて、スバくとさもうまさうにおのみになりました。

私が「お母さんはそんなたばこがすきですか」といへば、「耳とでもかへてのみたい」とじやうだんのやうにおつしやつてです。

これ等の缺點は、何れも聯想を追うて次からと無反省に進むところから生れたものでありますから、之が批正の如きも、なるべく其の表現活動の過程



に深い洞察を遂げた後に、子供と相談して、子供自らが之を訂正するやうにしなければならぬと思ひます。いきなり文法や論理の定規にあてはめて之を添削矯正することは、甚だしい教権の冒瀆亂用であり、しかも其の効果は極めて薄弱であると思ふのであります。

第二期、即ち尋常三四年になると、藝術的生活は内より外へ、情より知への發展傾向をとつてまゐりますし、そこに科學的生活が第一次の芽をふくことになりますので、その二つの原因は期せずして兒童の表現を客觀的寫生とか描寫とか言つたやうな方面に向はせ、しかもその内面に論理的規範が無意識に働くやうになります。例へば、

僕の弟

僕の弟は今年六つになる。いたづらが何より好きで、いじゅう僕らをこまらせる。此の間僕の帳面にひげむくぢやらの顔がかいてあつたから、弟に

さういつたら「知らんよ」といつて逃げて行つた。又きのふは姉さんの机のひきだしに、むかでのころしたのが紙に包んで入れてあつたので、姉さんは「ひやあ」といつてびつくりした。その時庭のつき山のかげから、くすくす笑つてこちらを見てゐる弟の顔が見えた。あれも弟が入れておいたのにちがひない。

弟はまたおどけものである。時々お父さんのきせるをもつて、たばこをすふまねをして、みなに笑はれることがある。これもつい一月ばかり前のことであつた。うちにお客さまがあつた時、弟はお客に來たをぢさんの帽子をかぶつて靴をはいて、ステッキをふつて玄關の前の庭をあちらこちらあゝるいてゐた。それをお母さんが見つけて「早くおかへしなさい、大變ですよ。」とおつしやつたが、弟は「いゝよ」といつてやはりあるきまはつてゐた。そこへお客さまがおかへりにならうとして、玄關においでになつた。すると弟は大きな靴をはいて、あわてゝかけてきたが、お客様に「をぢさ



ん、ちよつと借りたよ。」といったので、お客様もお父様も大そうお笑ひになつた。(尋三男)

この文章の如き、弟の特徴である「悪戯好き」と「おどけ者」の二つをうまく掴まへてゐる點は、藝術的觀照の深さと直覺の鋭さを物語るものであると思ひますが、同時にその精神内容を展開するに當つて、

年齢……………今年六つである。

僕の弟

特徴

悪戯好きである  
よくおどける

此の間僕の帳面に鬚面を書いてゐた。  
昨日姉様の机の引出しに百足蟲を入れた。  
時々煙草をのむまねをする。  
一と月ばかり前お客様の靴と帽子を借りた。

といったやうに、整然と筋の通つた書きぶりを見せてゐるところには、論理的な頭の働きを明瞭に語るものがあります。しかし此の文に於ける論理的な整然さは、決してはじめからプランを立ていやつたのではなく、實に兒童の頭の

明晰さが、一、叡知の鋭さが、無意識の間に此の文を生んだものであることを忘れてはならないと思ひます。

かくて藝術的表現活動の方面では、例へば人物描寫に於て、

□ 姉さんはせいが低いので、むやみに高い下駄をはいたり、大きなさんざしをさしたりなさいます。そして時々鏡の前に立つては、「ひかんく」と口癖のやうに言つていらつしやいます。それもせいが低いからです。姉さんと散歩してゐると知らない人がよく、「もう三寸高がつたらなア」といつて、うしろを振返つて御覽になります。(尋四女)

□ お父さんのまゆ毛には、太くて眞黒に光つた長い毛が、二三本あります。「福毛だ」といつて、大じにしていらつしやいます。(同)

□ こはんの時、蠅が居ないのに、いつも手をふつて、蠅を追つてゐるやうな手つきをなさるのが、お父さんのくせです。(尋四男)

といったやうな觀察の緻密さや鋭さが現はれて、物の特徴を掴むことが得意に



なり、更に進んでは、

□ 小さな手や、大きな手や、骨張つた手が、みんな赤いの（柿）を選つて  
とりました。（尋四女）

□ 向ふから傘が一つ、こちらへ歩いて来る。その傘が柳の木のかげにかく  
れたと思つたら、がらくと玄關のリンがなつた。お母さんのお歸りだ  
つた。（尋四男）

といったやうな具體の特殊化乃至單純化が現はれるやうになつて、所謂象徴描  
寫の域に一步をふみ込むやうになります。

論理的表現活動の方面では、前に述べた藝術的表現活動に即するものゝ外に、  
例へば、

### 製罐會社

僕の近所に製罐會社がある。製罐會社は罐詰の罐をこしらへる所で、一分  
間に千五百も出来るさうである。

罐をこしらへる初の機械は、先づ広いブリキの板を小さく切るのである。  
その切られた板を次の機械へ持つて行くと板は下から中へはいつて行く。  
そこでハンダがひとりでにつく。底がつく。蓋がつく。その次は大きい車  
の様な機械で、その機械はへしやげたのや、蓋や底のつぶれたのを選びわ  
けるのである。こゝを通ると、いよゝ立派な罐が出来上る。出来上つた  
罐は、僕等が體操の時ならんで歩く様に、又正しい列をつくつて進んでゆ  
く。まもなく箱の中へはいる。箱が一ぱいになると、又あたらしい箱が出  
て来る。そばにおいてある澤山のから箱は、見るまに一ぱいになる。それ  
を車につんでは、罐詰會社へ運ぶのである。（尋三男）

かうした筋のはつきりと通つた文を書く兒童も出てまゐります。  
しかしながら一般から見れば、此の時期は未だ私の所謂第一次の科學時代で  
ありますから、表現の關門に於ける論理的規範の働きは、勢ひ不十分であるこ  
とを免れません。随つて、兒童の文章には矢張り前に述べたやうな論理的、知